



東京大学 フューチャーファカルティプログラム (東大 FFP)

10周年記念シンポジウム 実施報告書

東京大学大学総合教育研究センター

東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）

10 周年記念シンポジウム 実施報告書

目 次

東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）の概要と	
設立 10 周年記念シンポジウム報告書刊行の経緯	2
〔開会挨拶Ⅰ〕	3
〔開会挨拶Ⅱ〕	4
〔祝辞〕	6
〔基調講演〕 東京大学フューチャーファカルティプログラムの軌跡と展望	8
〔招待講演 1〕 芝浦工業大学におけるプレ FD プログラム	27
〔招待講演 2〕 東大 FFP、「教える」を学ぶ、未来を創る ー パンデミック下の経験から ー	40
〔招待講演 3〕 「大学で教えて」学んだこと	48
〔招待講演 4〕 東大 FFP のさらなる発展への期待	55
〔パネルディスカッション〕	62
東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）の沿革	68
（付録） 修了生フォローアップ調査質問紙	69
（付録） 修了生フォローアップ調査集計結果	79
（付録） 10 周年記念シンポジウムポスター	87

東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）の概要と 設立 10 周年記念シンポジウム報告書刊行の経緯

東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）は、大学教員を目指す東京大学の大学院生・ポストドクター・教職員を対象に、「学びを喚起し、学習者が主体的に学ぶ場」を創出する為の知識・スキルの習得を支援することを主たる目的としたプレ FD プログラムである。

Faculty Development（以下 FD）とは、広義において「大学教育の組織的改善」を意味し、質の高い大学教育の実現のために求められる概念である。我が国においては 1990 年代頃から導入が検討され、2008 年 4 月 1 日に施行された大学設置基準の改正により、全ての大学において FD は法律で義務化されるに至っている。

FD の内容については、教育機関における教育、研究、社会的支援、サービス、管理運営の各側面の機能の開発と自己評価を、包括的かつ組織的に実施することにあるが、我が国における FD とは、教育に焦点を当て、教育の内容、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を目的とした、狭義における活動を意味することが一般的である。

大学設置基準の改正後、継続的に大学教員の教育能力の開発と向上が検討される中で、将来的に大学教員を目指す大学院生を対象とした教授能力の育成プログラム、いわゆるプレ FD プログラムの必要性が提唱され、2019 年の大学院設置基準の一部改正に伴い、その情報提供が努力義務化されるに至っている。

本学においては、改正以前、2013 年から東大 FFP を実施し、プレ FD の普及と教育能力を備えた研究者の輩出に努めてきた。研究領域に関する専門家としてだけでなく、学びを促進するためのファシリテーターとして、必要とされる知識と技術を体系的に修めた有為な人材を育成すべく、プログラムの内容や教授についても試行と研鑽を重ねてきた。

このたび 2023 年 4 月に本プログラムの設立から 10 年の節目を迎えるにあたり、これまでの取り組みを多様な視点から振り返り、今後のより有意義な FD の展開について検討する機会として、シンポジウムを開催した。

同会における講演及び議論によって得られた知見は、国内におけるプレ FD の普及において有用と考えられ、この内容を広く共有することで、同活動を実施している、ないし実施を検討している諸機関において少なからず貢献することを祈念して、本報告書を刊行するに至った。

ここに東大 FFP に参加頂いた修了生、そして活動を支えて頂いた関係諸氏に深く感謝すると共に、本報告書が次代の大学教員の育成の一助となることを期待する。

2023 年 4 月

東京大学フューチャーファカルティプログラム

栗田 佳代子 エルバス ニコラス ガブリエル 朴 源花 芳賀 瑛
河上 愛梨 大城 明緒 野口 由美子 鍋田 修身 他

〔開会挨拶Ⅰ〕

東京大学 大学総合教育研究センター センター長
浅見 泰司

東京大学 大学総合教育研究センター長の浅見です。本日は当センターのフューチャーファカルティプログラムの10周年記念シンポジウムにご参加頂きまして、誠にありがとうございます。フューチャーファカルティプログラム、FFPとは、将来のファカルティということで、教員としてご活躍頂く方々に、教育方法の基本的なスキルを身に付けて頂く為のプログラムとして2013年に始動し、今日に至っております。

ご承知のように初等中等教育においては、教員になる為の教員免許が必要で、その際に教育の仕方に関する教育を受け、また実習を行います。ただ、大学の教員になる為には特段の資格というのは必要とされません。もちろん大学の教員の方々は、ご自分で様々な工夫をされて、より良い教授法を考え、実践されていると思います。恐らくは、ご自分が受けた授業や、あるいは学会などで様々なプレゼンテーションを目にして、良い面を参考にしているのだらうと思います。

ただ、それでも、体系だった教授法の教育を受けていない、ということがあるのではないかと考えています。近年では大学教育の質保証が社会的に強く求められるようになっており、シラバスの開示のみならず、より良い効果的な教育方法を行わなければいけないということになってきております。この中には一方向の授業だけではなく、学生が能動的に学ぶアクティブ・ラーニングも推奨されており、教員にはレクチャーだけではなく、ファシリテーターとしての役割も期待されるようになってきております。また、2019年大学院設置基準の改正によって、プレFDの実施、あるいは情報提供が努力義務化されまして、FDやプレFDなどのファカルティデベロッパーの重要性がますます高まってきております。

本来は授業に対してどのように臨むべきなのか、シラバスをどのように作成するべきなのか、授業をどのようにデザインするべきなのか、さらには、実際に授業を行ってみて、自分の授業を改善するというのはどういうことなのか、といったことを知らなければいけないと思います。

このようなニーズに応える為に、大学総合教育研究センターでは、フューチャーファカルティプログラムを開設しております。先日、2月17日に第20期のフューチャーファカルティプログラムの修了者に対して履修証授与式を行いました。通算して954名の修了者を輩出しております。毎年約100名の定員に対して平均で約1.4倍の申し込みがあり、受講者の皆さまには熱心に取り組んで頂いております。修了者は本学のみならず、様々な高等教育機関に就職して、フューチャーファカルティプログラムで学んだことをご活用頂いております。

また、就職の面接に際しても、フューチャーファカルティプログラムで学んだスキルが生かされた、というご意見も頂いております。本日は、東大フューチャーファカルティプログラムが10年目を迎えた節目に、プログラムの運営者だけではなく、修了生や他大学からの多様な視点を交えつつ、これまでの取り組みを振り返って、今後のプレFD、あるいはFDの在り方について展望致します。本日の議論を契機として、より有意義なプレFD、ないしFDを検討出来ることを楽しみにしております。本日はどうぞよろしくお願い致します。

[開会挨拶Ⅱ]

東京大学 理事・副学長（教育、情報）
太田 邦史

皆さま、おはようございます。東京大学の教育と情報担当の理事兼副学長をしております、太田邦史と申します。このたび、東京大学フューチャーファカルティプログラム、東大 FFP が設立 10 周年を迎えました。プログラムの設置から現在に至るまで、代表としてご尽力されておられます大学総合教育研究センター、以下、大総センターとさせていただきますが、副センター長の栗田佳代子教授、そしてセンター長の浅見泰司教授、そしてプログラムの運営に関わられてきました大総センターのスタッフの皆さま、そしてプログラム修了生の受講者の皆さま、修了生そしてオブザーバーとしてプログラムをサポートされてこられた Alumni の皆さま、及び各界からご参加の先生方に心より感謝申し上げます。

東京大学として、このプログラムの歴史をいま一度振り返ってみたいと思います。元は 2010 年になります。当時の濱田純一総長の下に東京大学の行動シナリオ「FOREST2015」というものが発行されたのですが、個々の大学教員の教育能力を向上させるファカルティディベロップメント、FD ですけども、この実施方針が初めて明記されています。

これに基づきまして 2013 年に全学的な FD の取り組みとして大総センターに設置されたのが、この東大 FFP でございます。東京大学は、いわば製造元責任者として、必要な教育力を身に付けた大学教員を社会に送り出すべく、まずは現役の教員ではなく、大学院生に向けたプレ FD プログラムとしてスタートを切ったという形になっております。

本プログラムは、設立以来毎年約 100 名の修了者を輩出し続けておりまして、受講者層も非常に幅が広く、東京大学の全ての部局から集まってきており、専門分野を越えた大学院生向けの教育プログラムとして、学内で非常に高い評価を受けています。また、昨今の高等教育を巡るグローバル化の動きに対応致しまして、英語版のプログラム、UTokyo Global FFDP も今年度から始めております。グローバルに活躍する人材の育成という点におきましても、ますます発展を続けているという次第でございます。

本プログラムの定着と発展に関して、本学として特に次の三点を期待しています。まず、受講者がさらに増えてくる、拡充されることでございます。本学の大学院生向けのプレ FD として始まったこのプログラムですが、2016 年度からは本学教職員も受講可能になっています。ただ、受け入れ数としては現在、定員 100 名の二割程度に留まっているということで、これから東京大学としても FD プログラムを整備する上で、この東大 FFP の受講者が現教員にもさらに受け入れられるものとして発展していくことが望まれています。

二点目は学内におけるティーチングアシスタント、TA の育成研修により深く関わっていくということです。大学院生が授業の実施に当たって教授者をサポートする TA の業務でございますが、教育研修の場として、より積極的に活用出来るように文部科学省も提唱しております。TA の育成や研修は部局によって個別に置かれているのが現状となっておりまして、このような全ての部局から受講者が集まる東大 FFP では、学問分野を越えて、TA の教授者としての資質を高めるプログラム、機会として、活用出来る可能

性が非常に高いと考えております。TA 業務が教育研修の場として望ましいものになるように先導する役割を担うことを期待しております。

三つ目と致しましては、大学におけるオンライン授業の可能性を探る先駆者となることです。コロナ禍を経た今、オンデマンド形式を含むオンライン授業は大学における新しい教授方法として幅広い可能性を示しております。上手く本学でも定着させていきたいと考えております。東京大学 FFP は、既にフルオンラインの形式を採用しておりまして、授業時間の外でも講師やスタッフが受講者と細かく連絡を取り合いながら受講状況を丁寧にケアする非常にスムーズな実施が成されております。また、MOOC の一つである Coursera のプラットフォームでは、東大 FFP を基盤とした無料オンライン講座「インタラクティブ・ティーチング」を開講しておりまして、学外、さらには海外からも幅広い受講者を獲得しています。オンライン授業はダイバーシティ・アンド・インクルージョンの観点から見ましても魅力的な手段の一つです。正規の大学院の授業としても、また国内外、学内外に開かれた MOOC 講座としても、オンライン授業の可能性を切り開くことを期待しております。

ただ今述べましたとおり、コロナ禍の下、教育のオンライン化が急速に進んでいるわけですが、それはまた、改めて大学の教育の価値が問われているということも意味しております。大学教員は新しい教え方を身に付けた上で、教育の現場に立つことが求められるようになってきました。大学教員としての資質を高めると同時に、変化を恐れずに常に自分自身の考え方やティーチングスキルをアップデートしていく必要があるだろうと考えます。その為には学び続け、変わり続ける姿勢を大学の教員自身が持ち続けていくことが非常に大事になってくると考えます。このような姿勢を大学院生である時から学び、確立していくことが東大 FFP の目指すところでございます。

また、本プログラムはそのプロセスにおきまして、部局や学問領域の垣根を越えた仲間達と共に学び合うことを重視しています。それは、広い意味で相手のことを理解して学ぶ対話の営みでありまして、教育実践力のみならず、非常に汎用的な能力を学ぶプログラムとしても機能しております。さらに、プログラムの修了生がその受講の成果を生かして、それぞれの専門分野や研究テーマについて、アクティブ・ラーニングを取り入れた短いレクチャーを通じて、学外の方々にそれを披露することを、東大院生教職員ミニレクチャプログラムという形で行っております。これは大総センターと東京大学附属図書館の共催の下、これまで開催 19 回を数えております。大学の多様な知を、広く開かれたものにする取り組みとして、学内外から高い評価を受けている状況でございます。より多くの大学院生が受講出来るように、正規の授業として東大 FFP が今後ますます整備されていくことを期待しています。

このように受講者層とプラットフォームを広げて発展しながら、あっという間に 10 周年を迎えたということは、この東大 FFP が、より質の高い学びを提供してほしいという大学に対する社会の要請と、自身の専門知を分かりやすく伝えて、教えられるようになりたいという大学院生や教職員の学びに対する意欲の両方に応える形で、本学の目指す、多様性にあふれ包摂性に富むキャンパスの実現に寄与してきたことを意味しております。次の 15 周年、20 周年、さらにその先に向けて一層の発展を祈念して、私からのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

[祝辞]

文部科学省 高等教育局 局長

池田 貴城

文部科学省 高等教育局 大学教育・入試課長

古田 和之（代読）

文部科学省 高等教育局 大学教育・入試課長をしております、古田でございます。

局長の池田なのですが、国会開会中ということもあり、他の業務とどうしても調整がつきませんでしたので、私の方から代読をさせていただきます。お許し頂きますよう、よろしくお願い致します。

その前に、私からも一言ご挨拶をさせて頂きたいと思います。このたびは東京大学フューチャーファカルティプログラム、設立10周年、誠におめでとうございます。設立当初よりプログラムをけん引されてきました東京大学大学総合教育研究センターの皆さま、先ほどご挨拶を頂戴しました浅見センター長、また運営について色々とり仕切りをして頂いている栗田副センター長をはじめ、精力的に運営を担われているスタッフの皆さまに心よりお祝いを申し上げます。

ここにお集まりの皆さまに改めてご紹介するものでもありませんが、大学教員の能力開発、いわゆるFDにつきましては、2007年に大学院設置基準において義務化されまして、2008年には大学設置基準においても義務化されてきました。その後も、大学教員の授業の内容やその方法をどのようにして向上させていくべきかについて継続して検討が続けられ、将来、大学教員を目指す大学院生向けに、授業の設計や教育方法、評価方法等について体系的に学ぶFDプログラムの実施、FDプログラムと今申し上げたのは、いわゆるプレFDと呼ばれているものですが、その情報提供が2019年の大学院設置基準の一部改正によって努力義務化されました。現在、このプレFDを全学的に実施している大学は全体の5パーセント程度でございまして、独自のプレFDプログラムを提供出来る大学が限られている中、東京大学のフューチャーファカルティプログラムは、以前から精力的に取り組まれてきたと認識しております。このプログラムは、学内向けの教育プログラムとして出発しながらも、他大学の教員等を受け入れるスタイルを取り入れてこられました。また、今年度からは英語版のフューチャーファカルティプログラムの提供をスタートしたと伺いました。日本語、英語の両方を用いたプレFDのプログラムの整備と拡充は、これからの高等教育において非常に重要なものであると思います。

今後は、より広く受講が可能となるオンデマンド形式でのプログラムの提供や、実務家教員に向けた研修プログラムの開発提供などを手がけられることを期待しております。大学の教育関係共同利用拠点というものがございまして、これは大臣認定を受けている拠点を指しますが、国立大学をはじめ複数の機関がそれぞれにおいてご活躍頂いております。東京大学、大学総合教育研究センターはこの認定を受けておりませんが、それらのFDの拠点をも唸らせるような研修プログラムや運営方法について、斬新な発想の下で今後もご活躍頂ければと期待しております。何よりも、わが国の大学といえば、一般的に言えば東京大学を真っ先に思い浮かべる人が多いのではないかと思います。これからはぜひ、教育に力を入れている大学といえば東京大学としても認知されますよう、頑張ってくださいと思っています。

私は大学とは深い学びが出来る場所だと考えています。その学びの場が教室であるにしても、あるい

はオンラインであるにしても、わが国の大学や社会全体の国際競争力の発展の為には、授業で学生の皆さんと直接接する立場にある先生方一人一人のティーチングスキルが極めて重要な鍵となります。文部科学省としても、将来、大学教員を目指す方々には大学院生の段階から教育者としての資質を身に付けてほしいと考えており、東京大学フューチャーファカルティプログラムの進化が極めて重要と考えておりますので、このプログラムのますますの発展と関係する皆さまのご活躍を祈念しております。

それでは、局長から預かっております祝辞を、代読させていただきます。このたびは、東京大学フューチャーファカルティプログラム設立10周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。設立当初より、プログラムをけん引されてきた東京大学大学総合教育研究センターの浅見センター長をはじめ、歴代のセンター長、及びこれまで関係してこられた教職員の皆さまに心よりお祝いを申し上げます。

ファカルティディベロップメントを巡っては、各大学院における博士後期課程の学生を対象として、将来、大学教員となった際に必要となる能力を培う為の、いわゆるプレFDの機会や当該機会に関する情報提供に努めることが、令和元年の8月に大学院設置基準に努力義務化されました。東京大学フューチャーファカルティプログラムは大学院設置基準に規定される以前から、体系的かつ正規の大学院の授業として、長きにわたって継続実施されているプログラムであり、毎年100名近い修了者を輩出し続ける日本国内のプレFDプログラムの中でも特筆すべきのものであると認識しております。

近年では、他大学の教職員もプログラムの対象に加え、さらなる発展を遂げようとしていることに大変感銘を受けております。今後、他大学がプレFDプログラムを実施する際の、最も参考となるモデルとなることを見据え、プログラムの内容に加え、運営方法を含む様々な情報を発信し続けて頂くことを期待しています。

世界の社会情勢が大きく変化していく中、新型コロナウイルスの流行も加わり、大学教育の在り方も改めて問われています。対面で学生との濃密なコミュニケーションを効果的にとることや、インターネットを通じたオンライン授業の有効な実施方法など、教員のティーチングスキルの向上が一層、重要視されています。わが国の大学が諸外国の大学に比して世界中の方々にとって魅力的な学びの場となるよう切磋琢磨していく上で、大学院生の段階から教育者としての資質を身に付けておくことは極めて重要です。東京大学フューチャーファカルティプログラムがこれまでと同様、今後も先導的なプレFDプログラムを展開して頂くことを強く期待しているとともに、このプログラムを支える東京大学と大学総合教育研究センターのますますのご発展と、教職員の皆さまのご活躍を祈念し、私からの祝辞とさせていただきます。本日は、おめでとうございます。

[基調講演]

東京大学フューチャーファカルティプログラムの軌跡と展望

東京大学 大学総合教育研究センター 副センター長
栗田 佳代子

(スライド1)

皆さま、こんにちは。おはようございます。本日はお忙しいところお集まり頂きまして、ありがとうございます。私の方からは2013年の開設以来、担当講師として参りました立場から、フューチャーファカルティプログラムについての軌跡と内容のご紹介、それから展望について修了生の方々のアンケートも含めながら、ご説明したいと思っております。

(スライド2)

沿革については先ほどセンター長や理事の方からもご説明がありましたが、2011年の当時の濱田総長の行動シナリオの中に、教員の職能開発の実施方針の策定という事項がありまして、そこでフューチャーファカルティプログラムが開始されました。2013年の開始までに、本学はとても規模が大きく学部研究科も多いので、2年ほどかかったと私は聞いております。私は2012年の秋に着任しているのですが、その時にはもう決定が下りていて2013年からスタートという形になりました。フューチャーファカルティプログラムを1期2期と終えた後に、これを学内だけではなくて学外にも「教え方」という点で提供出来ないかということで、当時のJMOOC、オンライン講座の日本版、日本で行われているMOOCのプラットフォームであったgaccoというところで、「インタラクティブ・ティーチング」が2016年まで2年ほど開講されました。こちらは1期から4期までありまして、Teacher-BasedとSelf-Basedという、先生が一斉に毎週毎週同じペースで学習をするようにファシリテーションしていく学び方と、好きな時にスタートして学んでいける2種類の学び方があるのですけれども、「インタラクティブ・ティーチング」がgaccoで開講された時は、Teacher-Basedで皆さんに学んで頂くという形式で、2年ほど開講しておりました。

その後、フューチャーファカルティプログラムは、2016年に受講層を大学院生から教職員に含めた形に拡大しました、それ以前はオブザーバーとして先生方のご見学、ご参観を用意していたのですが、学内の先生から「受講者として参加したい」という声をたびたび頂くようになり、教職員にも拡大した端緒が2016年になります。その後、2016年で一旦閉講していた「インタラクティブ・ティーチング」を今度はグローバルのプラットフォーム、MOOCのプラットフォームであるCourseraにおいて再び開講し、これは現在に至っております。2020年はコロナになっていた時期ですが、翌年に東大FFPはオンライン形式に切り替わり、OCW、オープンコースウェアという形でも公開、提供し、オンライン化に対応しました。その後FFPの英語版であるUTokyo Global FFDPを今年度4月から開講しています。おかげさまでFFPが2013年に開講して以来、順調にといいますか、少しずつではありますが教えられる内容の幅を広げてきているところです。

(スライド3)

FFPが一体どんなものかと申しますと、「学びの喚起に必要な知識・スキルの習得」が目的となります。

大学教員はご存じのとおり、教員免許を必要とせずに教員になってしまうという実情を踏まえて、当初は大学院生の方々を対象に、一方向で教えるのではなく、自ら、いわゆるアクティブ・ラーニングですが、学ぶ学習者側が主体的に学んでいきたいという場を作る為の知識・スキルを習得することを主な目的としています。

また、本学の特徴である総合型の大学では、普段、大学院生は研究室に入ってしまうと、専門領域に限定され、横のつながりが弱くなりがちですので、その視野と人的なネットワークを広げて頂くという意味合いを込め、なるべく色々な領域の方からご受講頂こうと考え、全学のプログラムとしてスタートしました。

現在の受講期間と開催数は、半期2単位の授業に相当しており、半期に2クラス開講して年4回、同じ内容のものを実施しております。年間で100人輩出したいという目標がありましたので、クラスサイズは25人を1クラスとして開催しております。実際の内容は、私自身が講義、解説をする部分は、講義時間の半分ないし3分の1と、クラスが進展するにつれ徐々に減っていきます。知識を伝える以上に、相互に話し合うという知識の共同知、総合知を目指した授業になりますので、1コマ105分では足りない為、2コマ連続で授業をしています。現在の対象は大学院生とポスドク、それから教職員です。

特徴は、大学院生と先生方が一緒に受講しますので、お互い「さん」付けで呼び合い、学びの場において平等に色々なディスカッションをする、それこそダイバーシティの場を特徴としております。また、様々なアクティブ・ラーニングの方法、これは知識としてはインプットされてもなかなか使えるところまで至らないことが多いのですが、これらを体験しながら学んで頂くということを心掛けています。

ある種、この授業自体がモデルケースの一つであり、コロナ禍に、オンラインでいかに目的を達成し得るようなインタラクティブな場が作れるかということは、私たち自身にとってもチャレンジングではありましたが、モデルとなるような双方向性のある、自らが学べるような授業になるように設計しています。

それから、この後、少し触れますし、講演にもメンバーに来て頂いていますが、修了した後も学び続けることを是非行って頂きたいと思い、コミュニティの形成もしているところです。ちなみに、この右にありますお写真は、上はちょうど対面でグループワークをしているところで、下はオンラインになった時のグループワークの図です。皆さんでクラウド上の一つのワークシートを共有して取り組み、私が解説をしているところになります。

(スライド4)

先ほど、目的として「主体的に学習者が学べる場づくり」ということを申し上げましたが、シラバスにおけるこのプログラムの目標を、全てではありませんが提示しております。こちらは、今の教育においては当たり前のことなのですが、学習者主体の授業、一つ一つの授業がデザイン出来る、それから、学習者の評価を、むしろ今後もっと学んでいこうという羅針盤になるような形にデザインする、また講義でインプットされたものがきちんとアウトプットで出るように模擬授業を通じて活用出来る、などが挙げられます。模擬授業は、それこそ、いい内容を持っていても、伝え方という点が問われる重要な場面でもありますので、デリバリーの際の話し方や間などのことを、皆さんがお互いの授業を見る中で身に付けていってほしいと思っています。

また、プレFDやFDというと、教え方や教育に少しフォーカスするようなことが日本では一般的なの

ですが、研究やそれ以外の活動も含めて、今後どのように自分はキャリアを築いていくかを考える時間も最終回に設けています。その他に、グループワークの中で相手の方を尊重出来るコミュニケーション、これは教育に限らず、社会に出ても、自分の子どもを育てる上でも必要なスキルだと思いますが、そのようなことも、お互いに学び合う中で身に付けて頂きたいということで目標にしております。

(スライド5)

実際にこれがカリキュラム、プログラムの中身なのですが、これはグラフィックシラバスと言いまして、当初、本日ご参加頂いている大阪大学の佐藤先生に第1期においてご説明、講義をして頂いていたものです。このFFPでは、いつもこれを受講者の方々に冒頭でご説明するのですが、自分たちの授業の中身がどのように互いに結び付いているかを示す点で、知識や身に付けたい内容の地図のようなものです。

まず一つ目、高等教育の現状。この図は、ロッククライミングをするちょっと先を行く人と、少し後を追いかける人という意味付けになっていて、青い人が先生で、赤い人が学生さんというメタファーになっています。このロッククライミング、岩を登っていく中で岩肌、どんな岩かを知ることが「高等教育の現状」を指し、手渡すもの、登っていこうとするのを支えてあげる、助けてあげるということが、教育、ということです。手渡そうとしているものですね。手渡すにも受け止めてほしい、正しく受け取れるかどうかという点において「モチベーション」のことを知っていた方が良い、ということでここにモチベーションがあります。

この授業、教育の中身を分解してみると、一つ一つの授業の場合、まずコースと呼ばれる1個の授業科目があり、それに目的と目標があり、最後に評価があります。この2つの間に学習の内容があるわけですが、内容を構成する一つ一つの授業にまた、一個一個、目的・目標・評価・内容がある形で構成されています。一つ一つを分解する形でアクティブ・ラーニングの方法や、1回のクラスをデザインする方法、評価はどのようにするか、シラバスとしてコースをデザインする手法、などのことを学んでいきます。

その後、5で学びの振り返りを全体として行った後に、この1、2、3、4で学んだことを、6、7で模擬授業という形でアウトプットすることを、じっくり時間をかけて行います。最後に、このプログラムでは教育の中身、教え方について学ぶわけですが、先生としてどうやって岩肌を登って行くかを考える、ということ、キャリアパスという形で最後に学びます。このような形で東大FFPのカリキュラムは構成されています。

(スライド6)

私が着任した当時、以上のことを設計した根本となるベースは「新任教員研修」でした。これは国立教育政策研究所が当時掲げた基準枠組みというのがございまして、こちらが全部で五つ、「大学コミュニティについての理解」「授業のデザイン」「教育の実践」「成果評価・フィードバック」「教育活動の自己改善・キャリア開発」という形で、それらに全て、今申し上げたような内容が含まれています。ですので、この東大FFPが、プレFDとして体系的なものとしてある為には、非常に、この新任教員研修の基準枠組みが役に立ちました。

(スライド7)

続きまして、こちらは時間がないので、割愛しますが、これは当時、グループワークの中で、受講者がそれぞれ、ペアで説明をしているところです。

(スライド8)

次に、実際に応募者がどのように推移しているかというデータの話に移りたいと思います。こちらは横軸の下にある数字が、つい最近修了した20期を表し、縦軸は人数になります。青い部分は修了した人数で、青とオレンジの部分の和が受講者数です。オレンジの部分は残念ながら修了出来なかった人の数です。

折れ線グラフは、募集に応募して頂いた方の数で、この差が大きい箇所は、それだけ受け入れることが出来なかったということです。1期毎に25人、年50人ずつになるのですが、50人を超えている箇所は、コロナでオンラインになった折に、多く受け入れた時のものです。毎年偶数期は、ちょうど博士論文や修士論文がある為、応募者が落ち込む傾向があり、定員割れも所々にあったりはしますが、1年を通して見れば100人程度の輩出という目標を達成出来ています。

平均倍率は1.3倍。宿題が多いので決して楽なプログラムではなく、2回ほど休むと、もう単位が取れないということになっているのですが、修了率は94.5パーセントと、皆さんとても真面目に、熱心に受講してくださっています。

また、東大の特徴として、と言いますか、私たちがFFPを立ち上げる時に非常に重視したこととして、「教育者である前に、研究者としても頑張っている人が教育力も身に付ける」ということをすごく大事なところだと思ってしまして、特別研究員、つまりDC1やDC2、RPDやPDを取られている方を優先して受け入れています。その結果として、受講者の3割程度の方が特別研究員となっており、非常に優秀な方々にご受講頂いている現状を維持することが出来ています。

(スライド9)

修了者としては、本学は15の研究科がありますが、これが現在までの954名の内訳になります。その他では、附置研究所・センターなどにいらっしゃる方々にお受け頂いています。

(スライド10)

続きまして、FFPの特徴の一つとして「オブザーバー制度」があります。最初は学内の方もオブザーバーとして受け入れていましたが、学内の方は正規履修をする形となりましたので、こちらはそれ以前の学内出身のオブザーバーの方の属性となります。学外からはこのように非常に多彩なところから受講頂いており、中にはオブザーバーの方々のご見学がきっかけで、ブレFDを設置するに至った大学もございます。

(スライド11)

修了時においても、非常に高い評価を頂いてまして、こちらは每期、修了時に行っているアンケートの1期から19期までの結果ですが、殆どがこの青とオレンジのポジティブな結果を頂いております。「本プログラムに参加して満足でしたか？」という設問については、私達としては当たり前のこととして頑張っているところではありますが、「友人にすすめてみようと思いますか？」という項目についても、「とても思う」と「思う」を足しますと93パーセントのポジティブな評価となっています。

実際にFFPの募集をしますと、約3割の方は修了生の方々のお勧めで受講頂くことが多く、口コミで受講の輪が繋がっているということは、私達にとって大変ありがたいことですし、今後もそのような口コミで誘って頂けるようなプログラムを提供していきたいと思っております。

(スライド12)

ここから先はフォローアップ調査の結果となります。私たちは修了生とのネットワークをメーリングリストの形で持っていますが、修了生 903 名の方を対象に調査を実施し、オンラインでの回答をお願いしました。FFP を修了した後に、どのようなところに就職されているかなど、まだ調査としては分析しきれていないところもあるのですが、学習後の満足度やどのようなことが役に立っているか、あるいは FFP として追加すべきプログラムは何か、などの点をお伺いしています。

(スライド 13)

満足度に関して言いますと、先ほどの修了直後のデータに似て、大変満足という回答が得られています。ただし、これは 900 名近い中、回答頂いた方が 178 名ですので、もちろんポジティブな方がお答え頂いているという偏りは見込まれています。

(スライド 14)

こちらは今回初めて取ったデータですが、この左側が受講当時の身分ですね。当時、一番メインの部分は本学の修士課程や博士課程、そしてポスドクにおられた方々で、それ以外のところは教員や職員、オブザーバーの方にお答え頂いています。

この修士・博士・ポスドクだった方々が、今どういうところにいらっしゃるか、というのが、この右側にある列になります。これを見ますと、特に本学博士課程だった方、もちろん今も博士課程に在籍しておられる方も多いのですが、教員になられている方がかなりの比率でいらっしゃいます。本当は全数調査ではないので、これを類推して全てに外挿するわけにはいかないのですが、約 116 名の博士課程の方々のうちの半分弱ぐらいは教員になっておられる、あるいはアカデミア、研究職に就かれているという点は、私達 FFP としてとても心強い結果が得られていると思うところです。

例えば 19 期の方だと、まだこの夏に受けられたばかりなので、もちろん博士課程の方や就職されていない方もいますし、一方でもう 10 年も前に卒業していらっしゃる方もいらっしゃるのです、いつ FFP を受講して今は何年目なのか、という点は、詳細な分析が必要なのですが、得られたデータから概観するとこのような形になります。

(スライド 15)

次に、意識変容として、どのような意識が変わったかということを見たものが、こちらのグラフになります。教育力に関してのプログラムなので、例えば「学習者の視点から全体を見渡す」などは特に、研究だけをしては気付きにくいところを、私たちのプログラムでくみ取って頂いているかなと思います。続いて、具体的に授業改善をどのようにしたらいいか気が付いた、あるいは教員としての自信が付いた、FFP で学んだ内容がきちんと意識化されている、などといった辺りがメジャーな回答になっています。

(スライド 16)

具体的な回答の例ですが、「効果的な授業をする能力は、もともと持っているセンスだけではなく、工夫や努力で改善出来る」という、持っているものだけでなく、インプットによって変えていけるという気づき。また二つ目にある「他の参加者との受講を通して、研究内容に関してもいわゆる一般的なコミュニケーションの重要性みたいなものを考えるようになった」こと。あるいは、視点の転換や、研究と授業では向き合い方が違う、といった意識の変わり方が多く記述されていました。

(スライド 17)

次に、行動変容についてです。頭の中で考えているだけではなくて、実際にどのようなことが変わったかという点では、やはり「授業そのものが変えられるようになった」、非常勤をはじめ、教歴、教育職に就かれている方が、具体的に行動として変えて頂いているということが、この図から見てとれるかと思います。

(スライド 18)

例えばどんなことが行動変容であったかという点、チームで作業する、といったコラボレーションの重要性や、自分で能動的に企画していくなどの姿勢が変わったというのが一つ目にあります。二つ目は、専門分野の話をする際に、相手にどのように伝わるか考えて話すようになったという点が、行動として変わったということです。他には、情熱を確認出来たという例や、教育歴がなかった方が初めて教員になられた際に、色々な知識を持って教育職に就いたのでそれが反映されているという例も挙げられていました。このような結果を見る限り、やはり私達は多少なりとも皆さまの教育力の向上に貢献出来ているのかなというところを感じているところです。

(スライド 19)

学習機会の希望、修了後、何年かたった方々が、FFP に何が欲しいかを訪ねる項目では、よりアドバンストな内容や実践的な内容の拡充、交流の場としての学習会の企画や、単に飲み会をしたりするコミュニティを作ってほしい、などがニーズとしてあるようでした。15 期からはオンライン授業を実施していますので、15 期以前の方々におかれましては、やはりオンライン授業の対策をどうしたらいいのかということを、こちらのピンクの部分ですが、17 パーセントの方が挙げていらっしゃいます。

(スライド 20)

このような結果を踏まえて、これから実施したいことをお知らせしようと思います。先ほど Coursera の話もしましたが、今、私達は色々な方々に情報を届ける手だてとして、オンラインリソースを作っていますので、これを拡大していきたいと考えています。

(スライド 21)

今後に向けては、大学院生の方々には TA 研修との連携や、さらに色々なプログラムを増やしていきたいと思いますし、修了生の方々には先ほど挙げて頂いた発展プログラムや交流の場を作りたいと考えています。大学教員の方々には、今は授業という形式の為、非常に長時間拘束され、教員が受講しやすい状況ではございませんので、先生方が受講できるような FD プログラムを提供していきたいと思います。

それから、このプログラムを提供出来る人材という点も、これは東大だけの問題ではなく、全国的、世界的に非常に不足しているものなので、東大としてはこのようなところも取り組んでいけたらと思っています。

(スライド 22)

前職では大学改革支援・学位授与機構にいましたが、そこから見ると東京大学は、やはり非常に特別な大学だと感じるところです。それだけに、私たちが行動することの意味合いは大きいですし、インパクトが大きい分、将来を変えていくこと、教育をより良いものに変えていく役割も責任も持っていると思っていますので、その気持ちで進めていきたいと考えております。

(スライド 23)



先ほどこちらのミニレクチャについては鍋田さんの方からのリンクもございましたが、こちらも3月に入りましたら開催されますので、よろしければご参加頂ければと思います。

(スライド24)

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

(スライド1)

東大FFP10周年記念シンポジウム
2023.02.27

東京大学フューチャーファカルティプログラム 軌跡と展望



(スライド2)

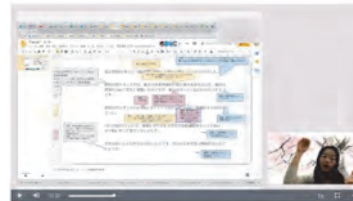
沿革

- 2011 「東京大学の行動シナリオ FOREST 2015」において「教員の職能開発（FD）の実施方針の策定と効果的な推進」が明記
- 2013 東京大学フューチャーファカルティプログラム開始
- 2014 Docomo gacco (JMOOC)において「インタラクティブ・ティーチング」開講 (-2016)
- 2016 対象を大学院生からポスドク・教職員にも拡大
- 2020 コロナ禍のもとプログラムをオンライン化
courseraにおいて「インタラクティブ・ティーチング」開講
- 2021 東大FFPを東大OCWで公開
- 2022 東大FFPの英語版
UTokyo Global FFDP開講



東京大学フューチャーファカルティプログラム

- 目的：
 - 学びの喚起に必要な知識・スキルの修得
 - 多様な専門領域にわたるネットワーク構築
- 期間・開催数：半期・4コマ/年
- クラスサイズ：25人/クラス
- 隔週8回，2コマ連続授業（210分）
- 対象：大学院生・PD・教職員
- 特徴：
 - 専門領域・職域を越えた多様な受講者
 - アクティブラーニングを体験しながら学ぶ
 - 授業自体がモデル
 - 修了後のコミュニティ



<http://www.utokyofd.com/>

シラバスにおける目標

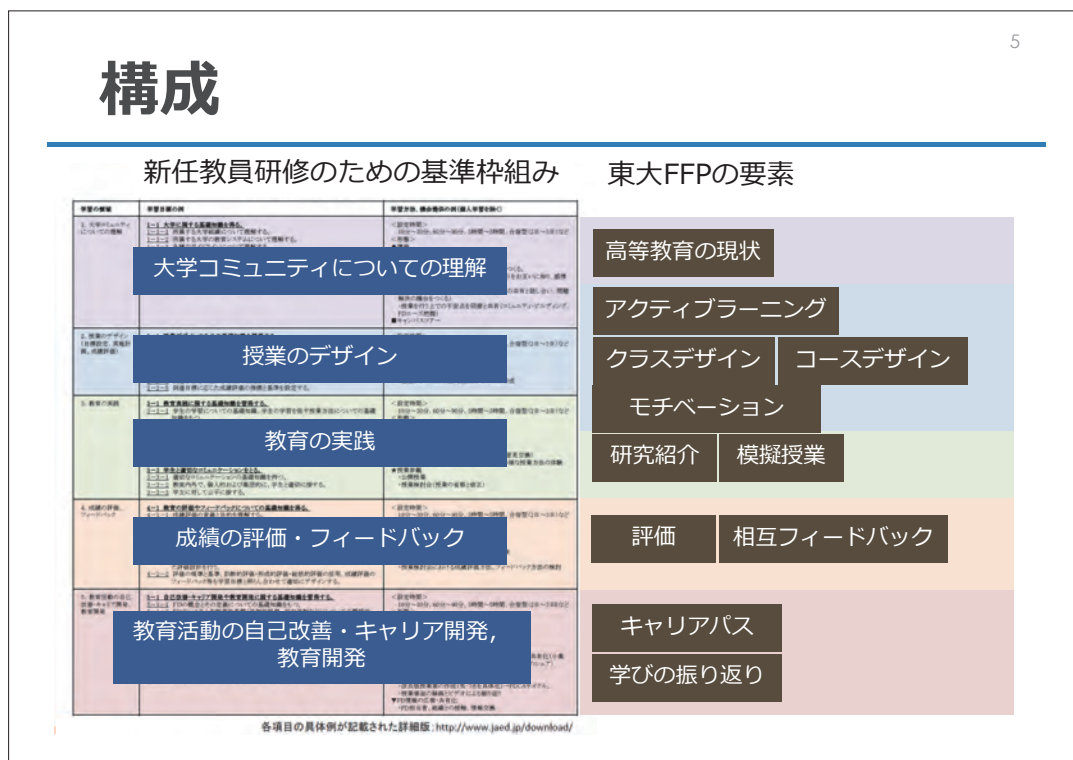
- 高等教育の現状について説明できる
- 学習者主体の授業のデザインができる
- 基礎知識をふまえた評価をデザインできる
- 学んだ知識を模擬授業として活用し実施できる
- 効果的なデリバリースキルの観点を知り、自分のデリバリーを修正できる
- キャリアパスについて考え、日頃の活動や今後の展望について整理できる
- グループワークに積極的に参加し、当事者およびファシリテーターとして相手を尊重できるコミュニケーションをとることができる
- 自分の学びを振り返り言語化できる



(スライド5)



(スライド6)



(スライド7)

6

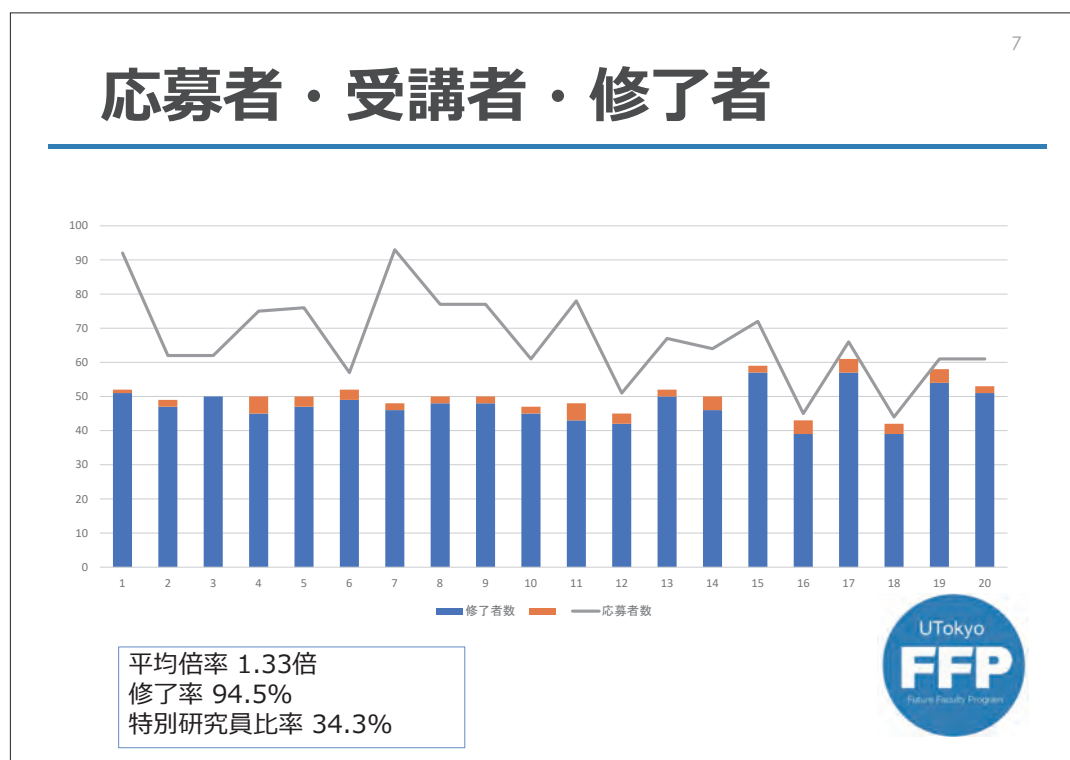
東大FFPのひとこま



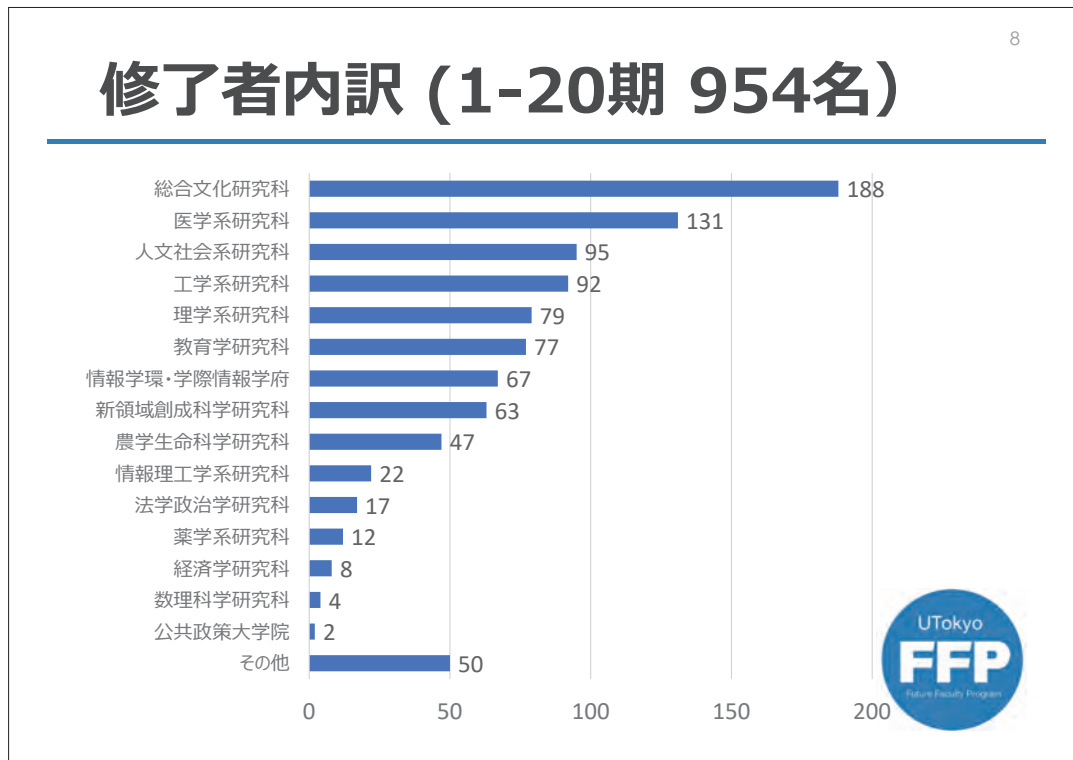
クラスデザインシートをシェアしています

A photograph showing a group of students sitting around a table, engaged in a collaborative activity. They are looking at and discussing various sheets of paper, which are identified as 'class design sheets'. The table is cluttered with these sheets, colorful sticky notes, and other materials. The students appear to be in a workshop or seminar setting.

(スライド8)



(スライド9)



(スライド10)

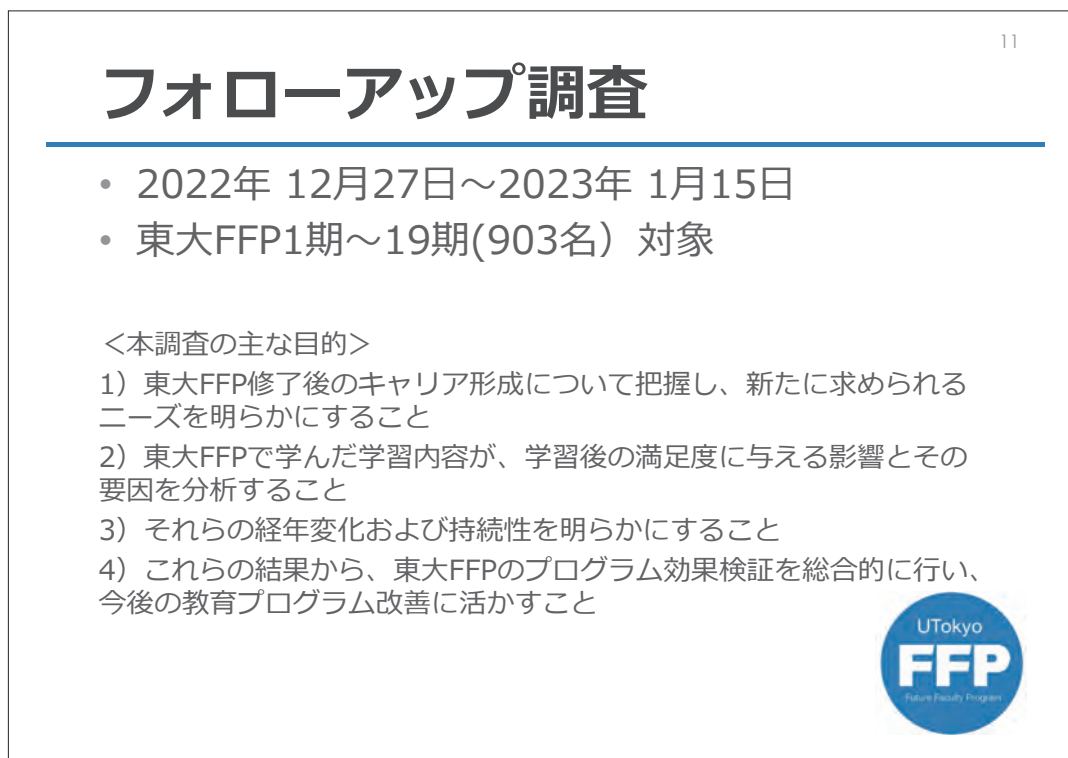
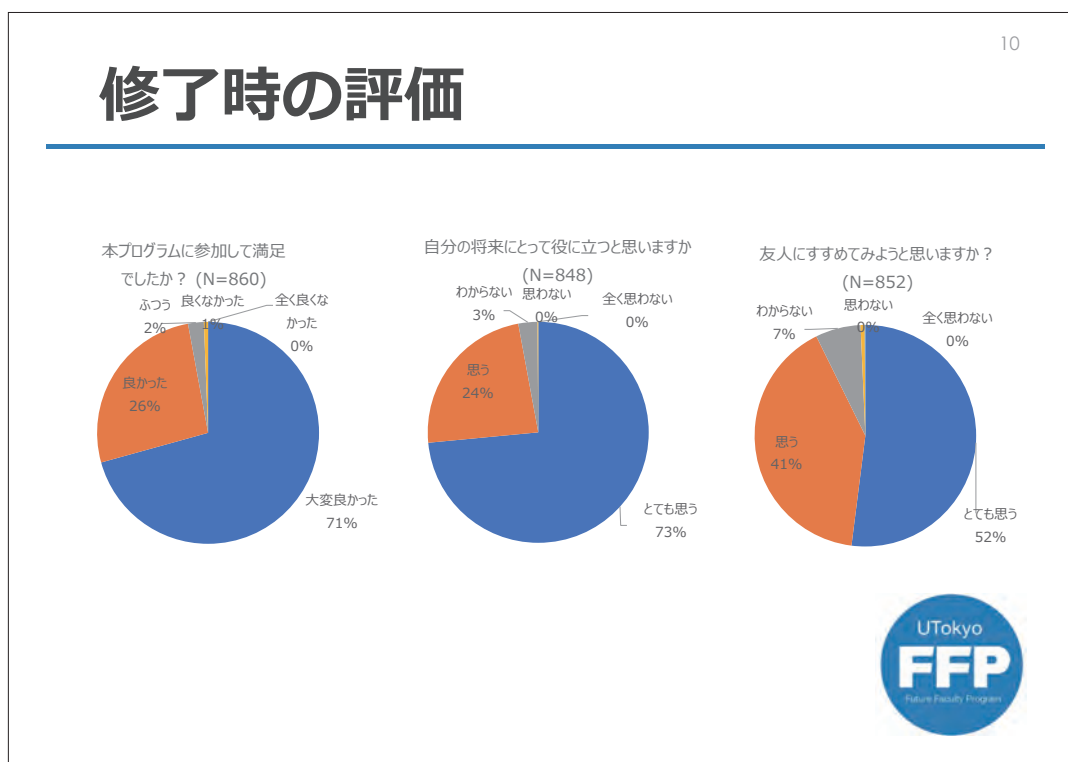
9

オブザーバー

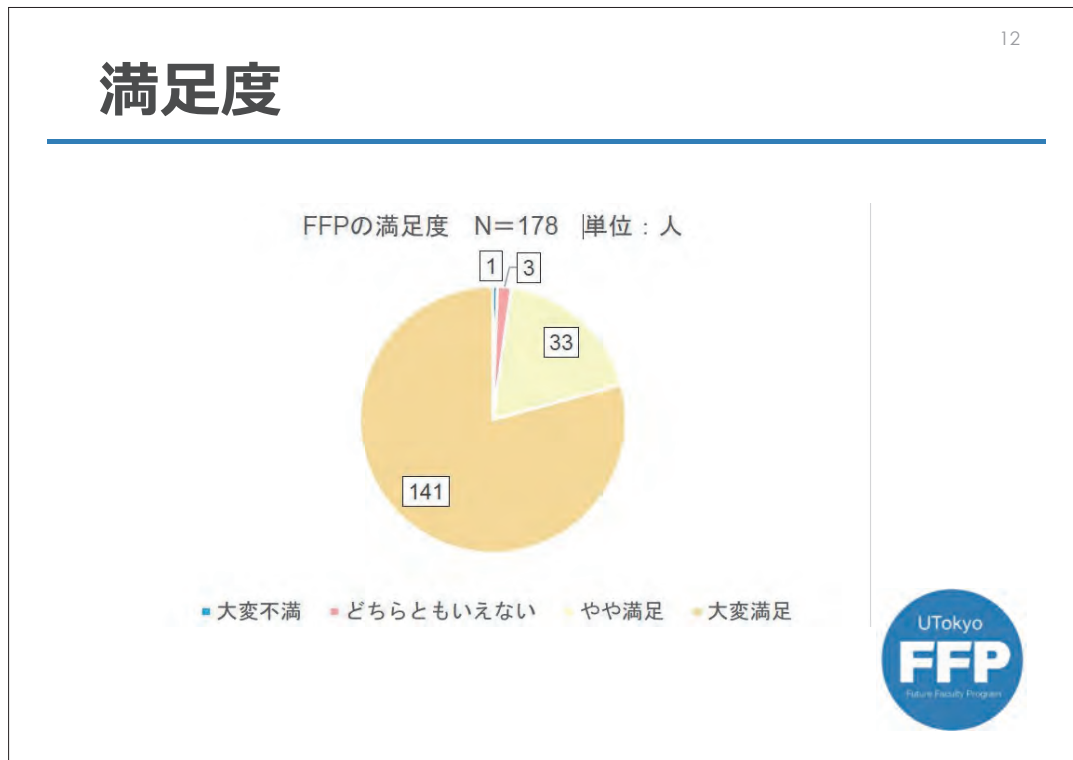
- 学内
 - 社会科学研究科・理学系研究科・人文社会系研究科・医学系研究科・法学政治学研究科・総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構・新領域創成科学研究科・農学生命科学研究科
- 学外
 - 東京工業大学・芝浦工業大学・埼玉大学・筑波大学・東京家政大学・東京藝術大学・明星大学・武蔵野美術大学・早稲田大学・明治大学・BBT大学・昭和女子大学・バルセロナ大学・国際医療福祉専門学校・愛知淑徳大学・岡山大学・神奈川工科大学・麻布大学・東北大学・一橋大学・東洋大学・成蹊大学・名古屋大学・京都文教短期大学・JAXA宇宙教育センター・防衛研究所・ANA総合研究所・博報堂・東京医科歯科大学

合計86名

UTokyo FFP Future Faculty Program



(スライド 13)



(スライド 14)

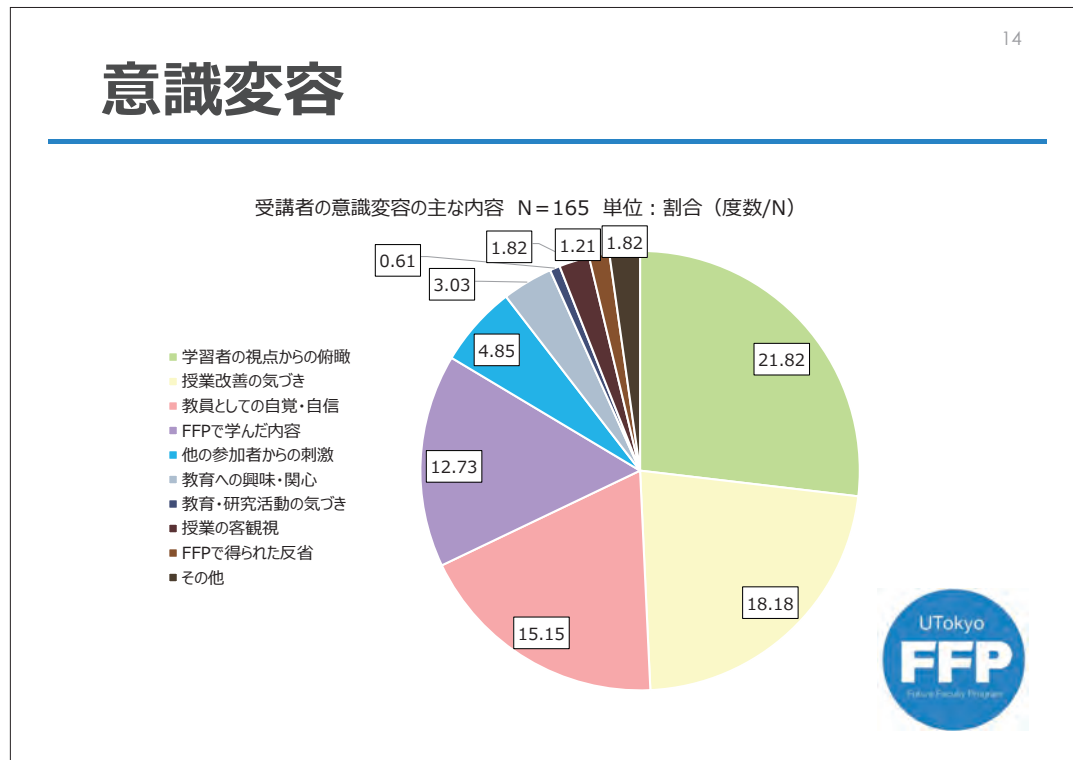
13

身分の推移

当時と現在の身分	現在の身分										総計
	修士課程	博士課程	ポスト ドクター	研究機関の 研究職	大学教員 (含高専短大)	小・中・高・ 特別学校教員	一般企業	大学職員 (含高専短大)	自営業・ フリーランス	その他	
当身の身分											
本学科目等履修 生・研究生	2						1				3
本学修士課程	3	2			4	1	7			2	19
本学博士課程		44	8	10	42	1	5	2	2	2	116
本学ポストドクター			8	2	8			1			19
本学教員				1	9						10
本学職員			1		3			3			7
オブザーバー					3					1	4
総計	5	46	17	13	69	2	13	6	2	5	178

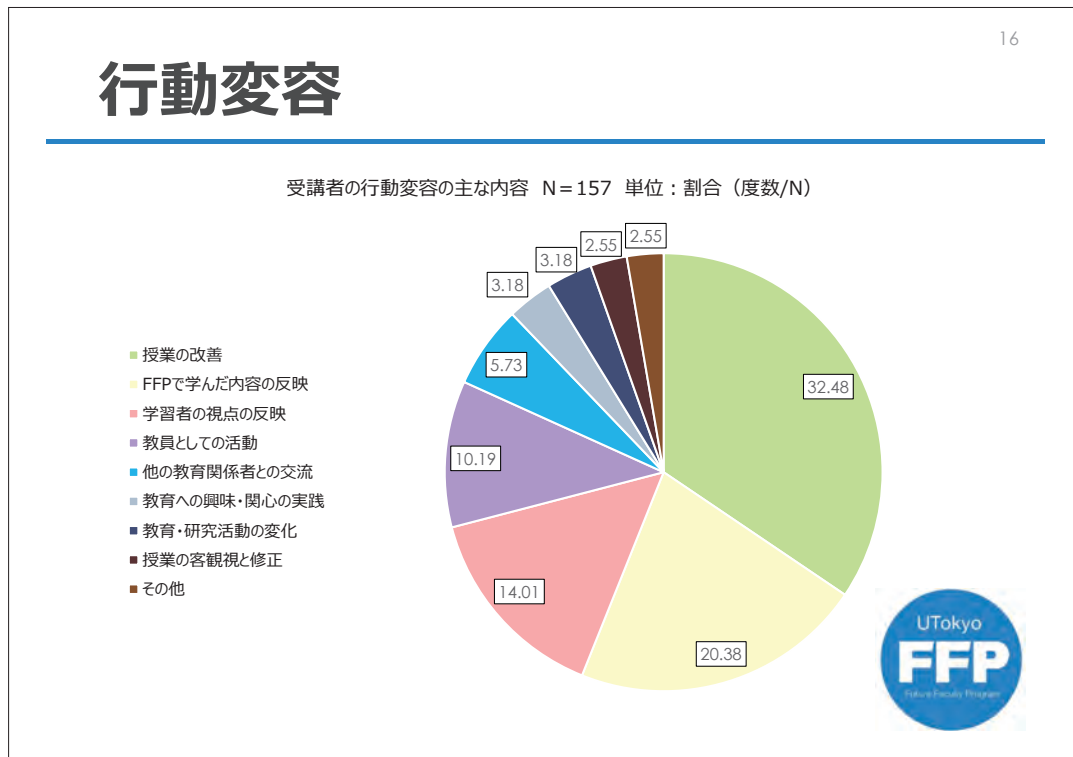
N = 178



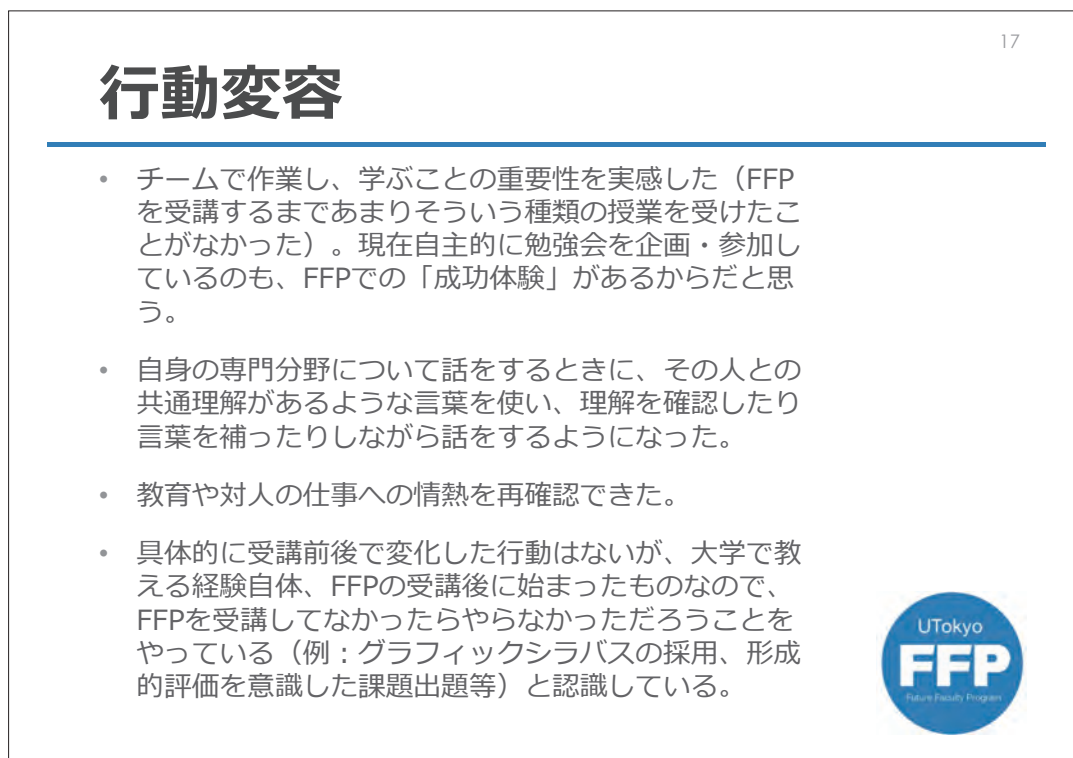


- 15
- ## 意識変容
- 効果的な授業をする能力は、元々持っているセンスによるだけでなく、工夫や努力で改善できることが分かった。
 - 様々な分野の参加者との受講を通して、自分の研究内容をいかにわかりやすく伝えるか、またどうしたら人を引きつける話し方ができるかをよく考えるようになった。
 - 教員としての自覚といいますか、学ぶ側から教える側への視点の転換ができたように思います
 - 研究とは、講義とは、発表とは、そのすべてにおいて、あらためて向き合うきっかけとなりました。
- UTokyo
FFP
Future Faculty Program

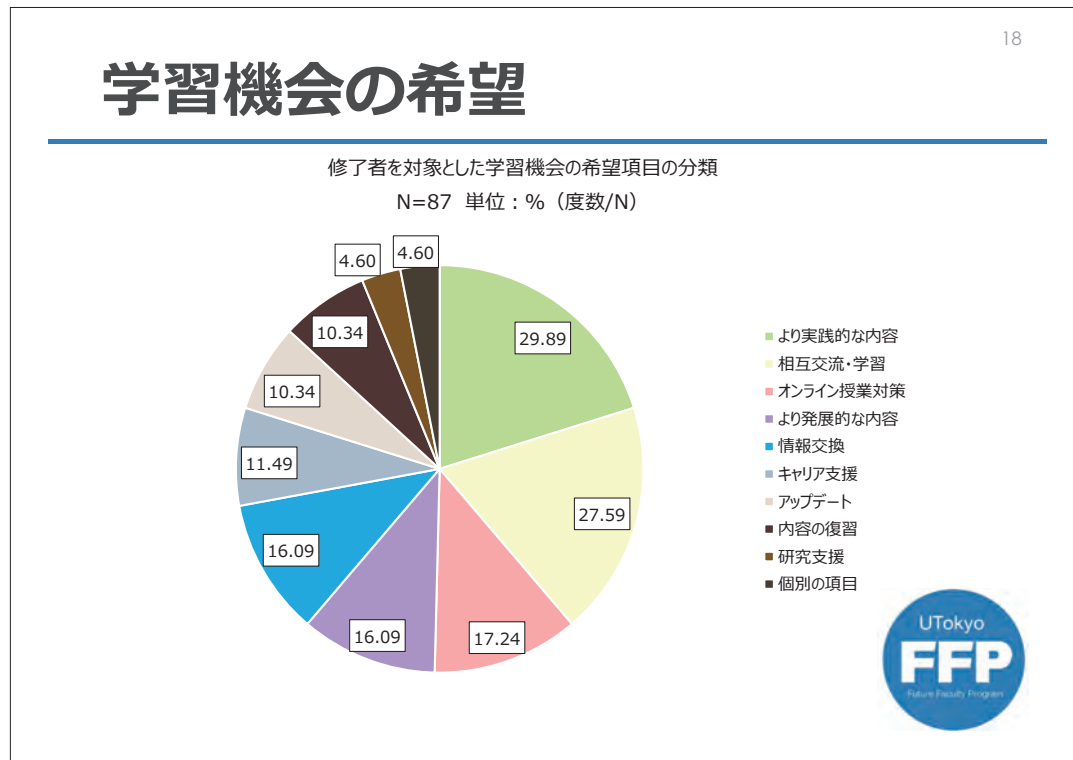
(スライド 17)



(スライド 18)



(スライド 19)



(スライド 20)

オンラインリソース

・ インタラクティブ・ティーチング

Coursera
<https://www.coursera.org/learn/interactive-teaching?>

東大FDのサイト
<http://www.utokyofd.com/mooc>

JREC-INでの公開
<https://jrecin.jst.go.jp/seek/SeekTop>

今後に向けて

- 【大学院生】プログラムの充実とTA研修との連携
- 【修了生】発展プログラムの提供と交流の場の充実
- 【大学教員】受けやすいプログラムの提供
- 【人材育成】プログラム提供できる人材の育成



担当者としての思い

- 前職（大学改革支援・学位授与機構）からみた
東京大学
- 高等教育におけるプレFDプログラムの役割
- 東京大学の責任



22

図書館ミニレクチャプログラム



<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/event/20230217>

東京大学総合図書館のサイト「イベント」に掲載中



23

引き続きどうぞよろしくおねがいたします



[招待講演 1]

芝浦工業大学におけるプレ FD プログラム

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授
榊原 暢久

(スライド 1)

ありがとうございます。芝浦工業大の榊原です。最初に、ここは重要なところだと思いますが、東大のプレ FD、FFP は国内で言うと、圧倒的なプレ FD プログラムだと思います。

実は、私は東大の FFP の 1 期生、本郷でやった対面の授業だったと思いますけれども、1 期性にオブザーバーとして参加をさせて頂きました。それから、16 期生のところで、これは Zoom だったと思いますけれども、半期を通して参加をさせて頂きました。その参加させて頂いた経験が、本学のプレ FD プログラムに圧倒的に影響を与えています。その意味で、栗田先生始め、東大の皆さま、関係される皆さまに、この場を通じて感謝を申し上げます、ありがとうございます。

(スライド 2)

では、本学の話をさせて頂きます。本学のプレ FD の特徴なのですけれども、先ほど文部科学省の方からお話があったように、本学、教育関係共同利用拠点に認定されていて、その 1 プログラムとして実施をしています。どういうことかという、全国の教員の方、職員の方、ポスドクの方、非常勤講師の方にも開かれているということなので、他機関所属の受講者の方が多いです。つまり、院生・ポスドク・教育経験の浅い教員の方が混在しているということです。まず、これが一つ目の特徴かなと思います。

それから、理工学教育共同利用拠点ということですので、緩やかな意味で、ですが、理工学教育に関わる大学・高専などの方々を対象としています。これが二つ目の特徴です。三つ目は、担当者が私一人ですので、毎学期、参加者 10 名程度で実施しています。さらに言うと、今年度後期で 6 期まで終わったことになるのですけれども、2020 年度前期から全て Zoom で実施をしており、これ以降も引き続き Zoom で実施をする予定です。これが本学のプレ FD の大きな特徴です。

(スライド 3)

少し中身について見ていきたいと思います。本学はどういう大学かという、見て頂ければ分かりますが、大学院生の数が東大と比べると、恐らく 1 桁違うのではないかと思います。博士課程の学生では、もしかしたら 2 桁ぐらい違うかもしれません。ですから、学内の院生に対してだけという目的で作られたわけではありません。ではなぜ、本学がプレ FD に、努力義務化されていますけれども、プレ FD に取り組んだかということをご説明いたします。

(スライド 4)

本学は 2027 年の 100 周年に向けて、五つの項目を大学全体の目標として共有しています。その中に、理工学教育日本一というものがあり、その一環で、教育関係共同利用拠点に認定されています。

(スライド 5)

ちなみに、来年度 4 月からの FD・SD に関わる共同利用拠点は、日本全国に 12 カ所あります。その中で、

理工系のFDに関わる拠点は本学のみとなります。

(スライド6)

例えば、こちらが今年度本学で実施した31のプログラムになります。学内のみと書かれたもの以外、全てのプログラムは学外の方も受講できます。プレFD、あるいは入職から3年以内の教員を主たる対象とした教育能力開発プログラムの一つとして、プレFDを本学として実施しているということになります。

(スライド7)

プレFDを実施出来る大学は、まだまだそれほど多くはないという話が先ほどありました。本学がいきなり実施出来たのは、それ以前から新任教職員研修プログラムを走らせていたことにあります。本学では、ここに書いてあるようなプログラムを大体30時間程度の新任教員研修にあたるものとして、新任教員の方に入職から3年以内に受講して頂くように実施をしております。このプログラムは、先ほど栗田さんからもありましたけれども、国立教育政策研究所の、新任教員研修の枠組みに沿ったプログラムとして実施していて、日本高等教育開発協会の方からプログラム認証を受けています。この認証を受ける土台があったからこそ、本学でプレFDを実施出来ているということがあります。

(スライド8)

少し中身に入っていきます。本学の受講生、これまで6期まで終わっていますけれども、提携単位互換協定のある大学院、提携校を含めて、受講生の4分の1ぐらいが院生です。他大学の院生が35パーセントぐらい受講しています。ポストクを含んでいます。他大学、あるいは高専などの教職員、教員の方が4割程度という形になります。最初に申し上げたように、これらの方々が程よく混在しています。教育歴のある方も混在している。これは大きな特徴だと言えます。

募集の方法ですけれども、学内及び提携校にまず募集をして、本学の拠点のメーリングリストで募集をかけ、外部のメーリングリストに募集をするという段取りを経ています。近々、2023年度前期の募集も流れると思いますので、ご興味のある方、あるいは周りの方で参加したらどうかと思われる方にご周知をして頂ければ幸いです。

(スライド9)

本学のプレFDの概要ですが、本学は100分、14回授業で半期が回っていますので、半期ごと、隔週だというのは東大と同じですけれども、2コマ続きの隔週7回で実施しています。Zoomで実施をされていて、教員歴3年以内の教員の方も受け入れています。大体10名程度で費用は無料です。要件を満たした受講者、具体的には7回のうち6回以上出席をして、最終課題まで提出した方々に受講証を出しています。さらに、本学の院生あるいは単位互換協定のある院生であれば、単位を付与することが出来ます。

(スライド10)

修了証としては、こちらの受講証、修了証をPDFファイルで全ての修了者にお渡ししています。

(スライド11)

プログラムの目標ですが、三つあります。授業デザインが出来て、シラバスや授業計画書として表現することが出来る。授業技法や評価方法について適切なものを選択出来る。模擬授業を実際に実施出来る。この三つが目標になっていて、上の色分けと下の色分けが対応している形で進んでいきます。もしかすると、東大の今のプログラムとは順序が微妙に逆になっていると思いますけれども、授業のシラバス設計の

時点から、どちらかというと理工系らしく積み上げ式にプログラムが進んでいく形になります。

7回ですので、東大の8回と1回違う部分は、恐らく TP あるいは AP、アカデミックポートフォリオといわれる部分が含まれていないのが大きな違いかなと思います。

(スライド 12)

修了証を出す為の条件は三つあるのですけれども、一つ目が「詳細シラバス」をしっかりと書けるということです。「詳細シラバス」というのは、ウェブに載せるシラバスではなくて、授業の初回に配布するようなシラバスで、こちらを作成することが出来ることが一つ目の課題です。

(スライド 13)

二つ目の課題は、授業で使うルーブリック評価表を作成することが出来ることです。

(スライド 14)

三つ目、こちらは1コマの計画書を作成することが出来る。この三つの課題を基に、6回目7回目で模擬授業と模擬授業検討を実施します。

(スライド 15)

模擬授業は、開始前1分程度で概要を説明して頂きますが、東大は今模擬授業の時間は何分でしたかね？7、8分ですか？

栗田：6分です。

榊原：6分。すごいですね。6分だとなかなか本学の場合には難しいので、10分で導入、展開、まとめの模擬授業をしてくださいという模擬授業をします。主発問、授業の中に発問を必ず入れてください、主発問を含むような内容を展開部に入れてください、そして双方向型授業にする。これが模擬授業です。

また、模擬授業検討というものを実施します。6回目に基本、2名の方に模擬授業をして頂いて、その模擬授業検討を1人当たり1時間ぐらいかけて行います。1時間1時間、計2時間ぐらいですね。その2人の方の模擬授業を通して、7回目に残りの方が模擬授業を実施する運びになります。

(スライド 16)

模擬授業検討は Miro というツールを使って実施します。良かったところ、気になったところ、皆さんで改善点を考えてみましょうということで模擬授業検討をして、6回目の集中的に行う模擬授業検討を以て、7回目のご自身の授業改善に寄与してもらおうということになります。

(スライド 17)

満足度についてですが、これまで50、60名弱の方が受講されています。今、標本数は52ですが、52名全ての方が受講してとても良かったと回答されていて、そのうち98パーセント、恐らく1名だったと思いますけれども、1名を除く全ての方が受講をぜひ勧めたいと回答されています。

(スライド 18)

行動変容を自由記述から拾ってみると、単にシラバスを書くだけではなくて、例えばルーブリックを、評価をどのように考えるのか意識しながら作ることが出来るようになったということ。それから、学生の主体性。具体的にはアクティブ・ラーニングを授業の中に取り込んで、授業を設計出来るようになったと



いうこと。ここは学習成果の可視化としてとても大事だと思いますけれども、開講されている授業の学科のディプロマポリシーを意識しながらシラバスを執筆出来るようになったということ。また、学生が集中出来る時間の配分や学生に考えさせるような授業、発問という事柄につながるとは思います、それらを意識しながら授業を組み立てられるようになったということ。下の例もそうですね、授業に発問を織り交ぜながら授業設計を出来るようになったという回答がありました。私からは以上になります。ありがとうございました。

(スライド1)

芝浦工業大学における プレFDプログラム

(2023.2.27 東大FFP10周年記念シンポジウム)

芝浦工業大学・教育イノベーション推進センター
榊原暢久

理工学教育共同利用拠点(教育イノベーション推進センター)
EDUCATIONAL CENTER FOR ENGINEERING AND SCIENCE (EDUCATIONAL INNOVATION CENTER)



(スライド2)

芝浦工大プレFDの特徴

1. 理工学教育共同利用拠点の1プログラムとして提供しているので、**他機関所属の受講者が多く、院生・ポスドク・教育経験の浅い教員が混在している。**
2. (緩やかな意味で)**理工学教育に関わる大学・高専等の方々を対象としている。**
3. 毎学期、参加者が10名程度である。
4. 2020年度から全6期、Zoomで実施している。



(スライド3)

芝浦工業大学

- ・工学部、システム理工学部、デザイン工学部、建築学部
理工学研究科 + 附属中高2校
- ・学生数 学部約8000名、修士約1500名、博士100名弱
- ・教員数 約350名、職員数 約200名（大学専任のみ）
- ・2キャンパスー豊洲（東京）、東大宮（さいたま）



(スライド4)

Centennial SIT Action

100周年(2027年)の芝浦工業大学



(スライド5)

2023年度FDSDに関わる共同利用拠点

北海道大学「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点」(高等教育推進機構・高等教育研修センター)
東北大学「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点」(高度教養教育・学生支援機構)
筑波大学「多様な発達特性を有する学生に対する支援人材教育拠点」(筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター)
筑波技術大学「障害者高等教育拠点」(障害者高等教育研究支援センター)
千葉大学「教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点」(千葉大学 アカデミック・リンク・センター)
岐阜大学「医学教育共同利用拠点」(医学教育開発研究センター)
名古屋大学「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」(名古屋大学高等教育研究センター)
山口大学「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点(知的財産教育)」(知的財産センター)
愛媛大学「教職員能力開発拠点」(教育・学生支援機構教育企画室)
九州大学「次世代型大学教育開発拠点」(九州大学 基幹教育院)
熊本大学「教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点」(熊本大学教授システム学研究センター)

芝浦工業大学「理工学教育共同利用拠点」(教育イノベーション推進センター)

ご案内メールリンクリスト <https://goo.gl/WQk8iF>



(スライド6)

「理工学教育共同利用拠点」2022年度実施 31プログラム

教育能力開発(ED: Educational Development)プログラム

(1) プレFD、入職から3年以内の教員を主たる対象とした教育能力開発

- ・大学教育開発論(プレFD) ・詳細シラバスの書き方WS ・授業デザインWS
- ・学生主体の授業運営手法WS、実践編 ・ティーチングポートフォリオ(TP)作成・完成WS

(2) 理工系教育に関わる教員の基礎的・共通的な能力開発

- ・ルーブリック評価入門WS ・理工系科目の評価について考えるWS ・英語による授業のためのWS
- ・英語による授業のためのスキルアップ研修 ・LMS使用法入門(学内) ・障がい学生への対応(学内)

(3) 理工系教育に関わる教員のさらなる能力開発

- ・研究室指導に必要なコーチング技能入門WS ・アカデミックアドバイジング入門WS
- ・反転授業入門WS ・PBL授業設計入門 ・デザイン能力を育成する授業設計入門
- ・グローバルPBL参加 ・SCOT研修見学

研究能力開発(RD: Research Development)プログラム

- ・研究内容を分かりやすい言葉で伝えるためのWS ・教育成果を可視化するための統計手法入門
- ・高等教育開発セミナー
- ・外部資金獲得支援(学内のみ) ・研究者倫理について理解する研修(学内のみ)

マネジメント能力開発(MD: Management Development)プログラム

- ・ミドルマネジメントについて考えるWS ・産学連携の知的財産マネジメント研修
- ・大学におけるダイバーシティについて理解する研修 ・アカデミックポートフォリオ作成・完成WS
- ・ファカルティデベロップメント養成講座 ・カリキュラムコーディネーター養成講座
- ・SDコーディネーター養成講座 ・安全衛生・危機管理に関する研修(学内のみ)



(スライド7)

プログラム認証書
第00001号
芝浦工業大学 殿

日本高等教育開発協会は本協会が定める大学教員の基本的な教育職能の基準枠組に次のプログラム(単位)が適合していることを認証します

プログラムの名称 新任教員研修プログラム

適合の単位(ユニット)
新任教員研修、詳細シラバスの書き方WS、授業デザインWS、学生主体の授業運営手法WS、学生主体の授業運営手法実践編WS、ティーチングポートフォリオ作成・完成WS

最新認証年度 2020年
初回認証年度 2020年
認証有効期間 7年

2020年4月1日
日本高等教育開発協会
会長 佐藤 浩章

- ・入職時新任教員研修(4月)
- ・詳細シラバスの書き方WS(9月)
- ・授業デザインWS(9月)
- ・学生主体の授業運営手法WS(3月)
- 実践編WS(3月)
- ・ティーチングポートフォリオ(TP)作成・完成WS

(TPWSを除く)
総計30時間程度の
新任教員研修

芝浦工業大学
SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

(スライド8)

受講生の概要と募集方法

【受講生】

受講生	割合
本学院生	24%
協定校院生	
他大学院生	35%
ポスドク	
高専教員	
専門職大学教員	
大学教員	38%
その他	

【募集方法】

- (1) 学内および提携校へ周知・募集
- (2) 本学拠点MLへ周知・募集
- (3) tulip MLへ周知・募集 等々

芝浦工業大学
SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

(スライド9)

芝浦工大プレFDの概要

- 【時期】 半期ごと隔週7回、水曜日4限～5限
- 【方法】 Zoomによる同時双方向型遠隔授業
- 【対象】 大学・高専等の教員を目指す大学院生、ポスドク、非常勤教員、教員歴3年以内の教員
- 【人数】 先着10名程度
- 【費用】 無料
- 【修了証】 要件をみたした受講者に付与
本学院生には希望すれば単位付与



(スライド10)

受講修了証



【達成目標】

- ## 【授業内容と課題】

-
- ```

graph TD
 A[シラバス作成] --> B[半期の授業設計]
 B --> C[学習評価設計]
 C --> D[教育方法設計]
 D --> E[コマ計画書作成]
 E --> F[模擬授業]
 F --> A

```



【1回目課題】詳細シラバス作成  
【2回目課題】詳細シラバス改訂

- 初回授業で配布する  
数ページにわたる  
詳細シラバス

[illegible]

(スライド 13)

## 【3回目課題】ルーブリック評価表作成

| 【芝浦工業大学通論1回目レポート課題・ルーブリック評価表】(10点満点)                                                                          |                                                                                          |                                                          |                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 学長、学部長、各学部長の略と関連させ、芝浦工業大学におけるこれまでの自らの学びについて振り返るとともに、今後、自らの学びをどのようにしていくのか、今学期の最終的なアクションプラン(自分がすべきこと)を述べることを要す。 |                                                                                          |                                                          |                                                    |
|                                                                                                               | 高評価                                                                                      | 中評価                                                      | 低評価                                                |
| 自らの学びについての振り返り                                                                                                | 学長らの略と関連させ、芝浦工業大学におけるこれまでの自らの学びについて振り返っている(3点)                                           | 学長らの略と関連させ、芝浦工業大学におけるこれまでの自らの学びについて振り返っているが、振り返りが浅い(2点)  | 芝浦工業大学におけるこれまでの自らの学びについての振り返りがない(0点)               |
| アクションプランの具体性・実現性                                                                                              | 自らの学びに関する今学期のアクションプランまで示されており、具体性・実現性がある(2点)                                             | 自らの学びに関する今学期のアクションプランが明確で、具体性・実現性が十分でない(1点)              | 自らの学びに関する今学期のアクションプランが示されていない(0点)                  |
| 展開の論理性                                                                                                        | 学長らの略とこれまでの自らの学びの振り返り、アクションプランとの関連の論理展開が合理的である(2点)                                       | 学長らの略とこれまでの自らの学びの振り返り、アクションプランとの関連の論理展開が、合理的でない部分がある(1点) | 学長らの略とこれまでの自らの学びの振り返り、アクションプランとの関連の論理展開が合理的でない(0点) |
| 日本語や文章の完成度                                                                                                    | 日本語や文章の書き方に誤りがない(2点)                                                                     | 日本語や文章の書き方に若干の誤りがある(1点)                                  | 日本語や文章の書き方に誤りが目立つ(0点)                              |
| 文章の分量                                                                                                         | 5項目ともに、指定された文字数の範囲で書かれている(1点)                                                            | 項目が指定された文字数の範囲で書かれているが5項目以下である(マイナス1点)                   | 指定された文字数の範囲で書かれていない(マイナス1点)                        |
| レポートの形式                                                                                                       | レポートの形式(配布されたファイル)に準い、1行40字、A4用紙1枚、縦長使用、横書き、表紙のみ、文字サイズ12pt、表やグラフ等は表紙)指定された形式を守っている(満点なし) |                                                          | レポートの形式が指定された形式を守っていない(マイナス1点)                     |

【注1】 左の各項目ごとに自己評価し、あてはまる部分に黒ペンで丸印をつけること

【注2】 左の各項目が評価基準なので、各項目が高評価になるようにレポートを作成すること

【注3】 左の自己評価点の合計・学生番号・名前を、下に忘れずに記入すること

【注4】 この評価表もレポートとともに、**ホッチキス止め等せず2枚重ねて、必ず提出すること**(この評価表を添付しない場合にはマイナス1点)

|         |  |
|---------|--|
| 自己評価点合計 |  |
| 学生番号    |  |
| 名前      |  |
| 評価点数    |  |

(スライド 14)

## 【4回目課題】1コマの計画書作成 【5回目課題】1コマの計画書改訂

| 氏名： 榎原 久久                  |             | 臨討する1回の授業の到達目標                                                   |
|----------------------------|-------------|------------------------------------------------------------------|
| 所属： 教育イノベーション推進センター        |             | テイラーの定理・マクローリンの定理について理解し、与えられた関数の、与えられた点での近似式を求めることができる (剰余項は次回) |
| 担当科目： 微分積分第1               |             | 上記到達目標を修得する上で、学生が最も困難とすること                                       |
|                            |             | 高等数学の級数では、級数を扱う関数列を扱わない。従って、関数を多項式で近似するという考え方がイメージしづらい           |
| ○授業計画 (1回)                 |             |                                                                  |
| 時間                         | 展開          | 必要                                                               |
| 105分<br>09分<br>109分<br>14分 | 導入 1<br>20分 | 教室入室・資料配布<br>(G3,G9)小テスト開始<br>(G3,G9)解答解説<br>(G3,G9)前題等の質問対応・解説  |
| 20分                        | 導入 2<br>4分  | G1,G3事前課題の確認・質問対応                                                |
| 24分                        | 展開 1<br>6分  | G1,G2,G4展開、個人思考、ペア思考、シェア・解説                                      |
| 30分                        | 展開 2<br>15分 | G4,G5,G6,G7解説、解答記述、個人思考、質問対応                                     |
| 45分                        | 展開 3<br>18分 | G4解説                                                             |
| 63分                        | 展開 4<br>9分  | G4,G5,G6,G7解説、解答記述、個人思考、ペア思考、質問対応                                |
| 72分                        | 展開 5<br>13分 | 展開、ペア思考                                                          |
| 75分                        | 展開 5<br>13分 | G7,G8,G9クイズ、ペア思考、説明、発表                                           |
| 85分                        | まとめ<br>15分  | G7,G8,G9小テスト開始                                                   |
| 100分                       |             |                                                                  |

## 【6回目課題】模擬授業準備

- (開始前1分程度で)授業概要、対象者、人数、カリキュラムの中の位置づけ等を説明
- 授業の一部を切り出すのではなく、10分を「導入」・「展開」・「まとめ」の構成に
- 「展開」には主発問を含む内容を入れる
- 解説で終わることなく、双方向型授業にするが、学生の活動部分は省いて良い

## Miroを用いての授業検討



## 受講生の満足度(n=52)

この授業を履修して良かったですか？

100%の受講生が「とても良かった」と回答

受講を他の大学院生やポスドクに勧めたいですか？

98%の受講生が「ぜひ勧めたい」と回答

## 受講生の意識・行動変容(自由記述から)

- シラバスを考えるときルーブリック評価も考え緻密にすることができるようになった。
- 研究室内のゼミの指導で、学生の主体性を引き出すことを意識するようになった。アクティブラーニングについて学んだことがそのような意識の変化を生んだのだと思う。
- ディプロマポリシーとの関係を意識し、シラバスを執筆すること。集中できる時間の配分、学生に考えさせる授業構成を意識して授業を組み立てるようになった。
- 授業内容に質問を織り交ぜるという意識を持つようになりました。

## [招待講演 2]

### 東大 FFP、「教える」を学ぶ、未来を創るーパンデミック下の経験からー

オックスフォード大学 博士課程（法学）在学中  
波多野 綾子

（スライド 1）

このたびは、私の経験を共有する機会を頂きましてありがとうございます。今ご紹介に上がりましたオックスフォード大学博士課程の波多野綾子と申します。今回は「教える」を学ぶ、未来を創るーパンデミック下の経験からーと題させていただきました。私の東大 FFP での経験と、今それがどのように応用されているのかということについて簡単にご紹介させていただければと思っています。

（スライド 2）

まず簡単に自己紹介させていただきたいと思いますが、ご紹介いただきました通り、東大 FFP15 期生として、夏学期に受講をさせていただきました。以前は対面講義で開催されていたと思いますが、私の受講した期はパンデミック下のため完全にオンラインで行われました。当時東京大学総合文化研究科で国際法・人権を専攻しておりましたが、在外で研究を続けておりましたので、オンライン開催ということで貴重な受講の機会をいただけたということになります。今も博士課程で引き続き在学中、勉強中なのですが、英国に在住しております。なので今、おはようございますと言おうとしたのですが、まだ英国時間では深夜でして、こんばんはとなります。写真も明るいのか暗いのか分からない感じになっています。

皆さんは英国の大学教育において現在最も注目を浴びている問題について、ピンとくる方はいらっしゃるでしょうか？ FFP のワークだとチャットに書いてください、手を挙げてください、と言うところですが、取りあえず本日は、時間の関係もありますのでそのまま進めさせていただきます。

（スライド 3）

現在、英国では、英国最大の教職員組合（UCU：University and College Union）と同国の大学 150 校の教職員 7 万人以上が賃金、労働条件、年金をめくりストライキを実施しているんです。その中で主張されている一つの点は、自分たちは授業に対して報酬を受け取っているものの、報酬にはその準備に実際かかる時間が考慮されていないということです。

例えば、ある教員は、1 時間の授業に対して 30 分の準備時間が支払われているとされていますが、それでは実際に必要になる準備時間に対して全く十分ではない、つまり、フェア（公正）な賃金（ペイメント）ではないと主張し、このようなストライキに参加しています。

ここで私が言いたいのは、授業というものは単に自分の意見を述べる場ではなく、教員、生徒、スタッフなどさまざまな関係者が関与する中で行われるものであり、今回のシンポジウムも同様です。そのため、準備には時間と労力が必要であるということです。真剣に教育を考えると、このような問題は日本や東大に限らず、国境を越えた課題として認識されていることが、英国でのフェア・ペイメントの問題を見ても実感できると思います。

（スライド 4）



東大 FFP は、その準備をどのように行うのかを体系的に学ぶことができる非常に貴重な機会でした。今回の話をするにあたって、自分が FFP に応募した際の動機を見返してみました。「大学教員としてのキャリアを築きたい。そのために実践的な知識やスキルを身につけたい。さまざまな修了者の方々に勧められたことから、FFP を通じて自分の能力、教授法、教育法に関するスキルを高め、東大 FFP の発展と深化に貢献したい」という内容です。

今回は短いプレゼテーションではありますが、私の当時の目的が達成されたのかどうかをお伝えしようと思いますので、皆様もこの野心溢れる応募動機をご覧になって、実際はどうなったのだろう？という観点から聞いていただければ、と思います。

(スライド5)

この応募の時にもう一つ求められたことが、「自分の研究について他分野の人に分かるように 200 字程度で説明してください」というものでした。ここから FFP は始まっていたのだと思うのですが、私たちは自分と同じ分野の専門家に話すだけでなく、他の分野の専門性をもつ方や、アカデミアに所属しない人に対しても、分かりやすく説明することが重要だと思っています。当時の応募で書いた内容を見ると、我ながらかなり修正すべき点が多い文章だと思います。その意味で、FFP で学んだことがあったのではないかと応募書類を見返しても実感するところです。

(スライド6)

私が FFP で学んだことについて、本日強調したい点は3つあります。まず一つ目は、あらゆることにおいて、なぜ授業にこれが必要なのかという存在意義を問う姿勢です。このコースは、コース、クラス、プレゼンテーションなどが有機的に組み合わさっていると思いますが、常に「なぜこれを行わなければならないのか」「誰に対して行っているのか」ということを考えさせられるデザインになっています。参加者のモチベーションを高めることやアクティブ・ラーニングの必要性は、他の場所でも言われていることだと思いますが、そのモチベーションを高める理由やアクティブ・ラーニングを導入する理由を、コースの目的やレゾナードルに対して常に考える機会や必要性を実感する機会でした。

2つ目は、モチベーションやアクティブ・ラーニングなどのさまざまなデザインにおいて、ARCS モデルや ADDIE モデルなどの体系的なデザインや理論に基づいたものを実際に自分で応用する機会を得たことです。それにより、理論から実践へとスムーズに移行できる機会を得たのではないかと思います。

3つ目は、オンライン授業環境で、参加者のモチベーションを高め、学びを最大化するために、アクティブ・ラーニングを活用してエンゲージメントを促す環境を創り出すことです。パンデミック下では授業は全てオンラインでしたので、対面授業ともちろん共通することもあります。画面の向こう側にいる参加者、自分の学生さんや同じ授業を受けている方が見えにくいという課題がありました。先ほど（別の発表者に）おっしゃって頂いた Miro や今回の Slido、または Zoom の様々な機能などを組み合わせて、楽しく学びのあるデザインを実現する方法について、オンラインならではの学びやプレゼンテーションのコツの共有も非常に役立ったと思っています。

(スライド7)

まとめますと、「教える」を学ぶ、「学ぶ」を学ぶという、よく分からない、駄洒落みたいな感じになっているのですが、この FFP のコースで非常に感じたことは、例えばこのガニエの9事象、これを自

分のコースデザインやクラスデザインを作って考えてみよう、模擬授業などで試してみよう、ということをするのですけれども、東大FFPそのものが、このような理論に準じた構成になっていて、自分も東大FFP受講を通してその理論を実践を通じて学んできました。ですので、このマトリョーシカみたいに、教えていることを自分も学んでいる、受けているように感じます。教え方を学んでいるのですけれども、コースの中で同じこと学んでいる他の参加者からも更に学び、逆に他の参加者も学んでいるという、学びのエコ・システム、正のサイクルと言うのでしょうか、インタラクションによるシナジーや化学反応が色々なところで起きていると感じました。

(スライド8)

最後に、東大FFPでの学びがいかに今に生きているか、ということについて。現在、私は英国での研究活動に従事しているのですが、論文執筆はもちろんのこと、学会や勉強会でプレゼンテーションを行ったり、また、さまざまな会議で議論やモデレーションを行ったり、学部生を教えたりしています。また、国境を越えて色々な参加者がハイブリッド（オンラインと対面の両方）で集まって議論を行うような場も非常に多く存在します。そのような場では、常にアクティブ・ラーニング、人の発言を理解し、自らの考えをわかりやすくのべる、という姿勢がないと、自らの学びも最大化できず、学生・参加者・コミュニティへの貢献もできません。自分の学びも他者の学びにも、このような姿勢が非常に必要なので、このFFPで学んだ3K、敬意を持って忌憚なく建設的に、を常に実践するということが、この英国での学びや教えることに非常に役立っていると日々感じています。また、自分が教えていない場合でも、他の人のファシリテーションやコースを見て、これはThink Pair Shareを使っているなど気付いたり、FFPで頂いた評価に関する項目を見ながら、この部分がすごくうまいな、もしくは、ここに改善点があるなどということを、頼まれたわけでもないのにチェックしたりしていることから、FFPの学びがいかにされている実感があります。

東大FFPには、講義のサポーターとして、引き続き海外から参加させていただいております。時差があっても結構大変な時もありますが、毎回素晴らしい学びの機会をいただき、また、コミュニティの一員として、修了生として、応募動機にも掲げた「東大FFPの発展と深化」に微力ながら貢献させて頂いているのかなと思います。

(スライド9)

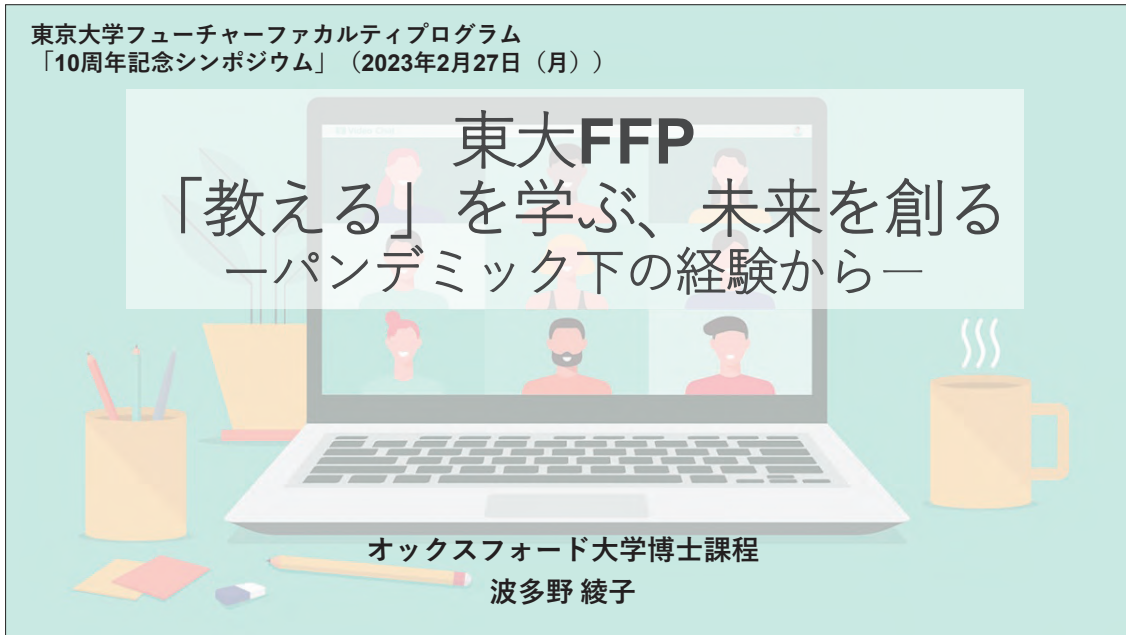
これで最後なのですが、東大FFP10周年ということで、10歳のお誕生日、本当におめでとうございます。今までの感謝をこめて、これからの東京大学FFPの未来に向けてAll the Bestということで、これからも色々貢献出来れば嬉しいなと思っております。よろしくお願いします。ご清聴、ありがとうございました。

(スライド1)

東京大学フューチャーファカルティプログラム  
「10周年記念シンポジウム」(2023年2月27日(月))

東大FFP  
「教える」を学ぶ、未来を創る  
ーパンデミック下の経験からー

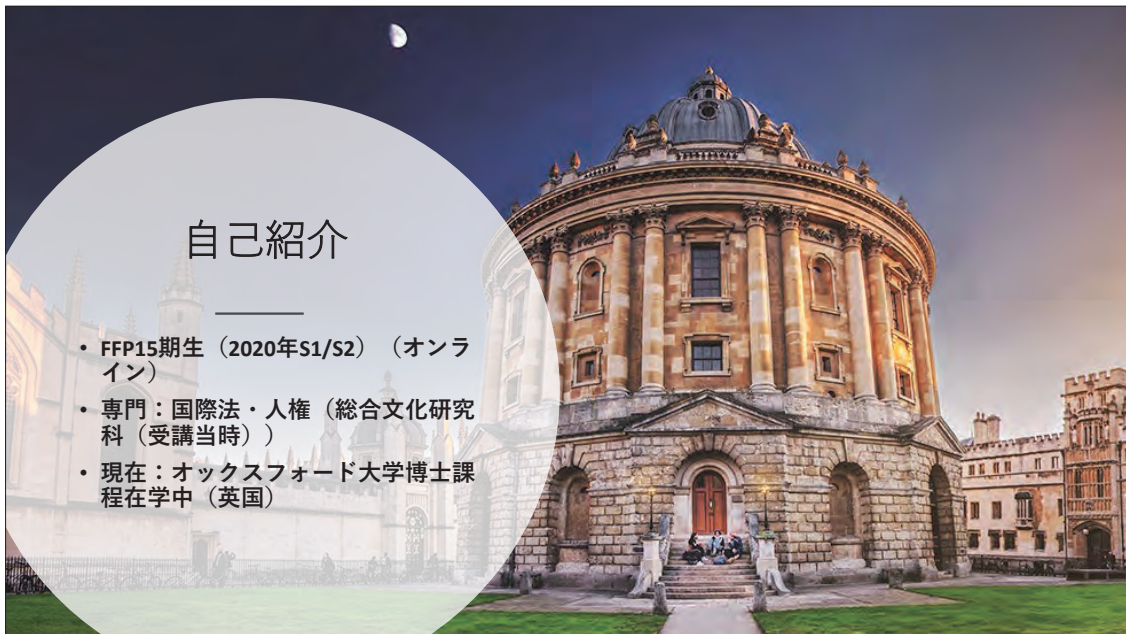
オックスフォード大学博士課程  
波多野 綾子



(スライド2)

自己紹介

- FFP15期生(2020年S1/S2)(オンライン)
- 専門: 国際法・人権(総合文化研究科(受講当時))
- 現在: オックスフォード大学博士課程在学中(英国)



(スライド3)



## 1時間の授業に必要な準備時間は…？

- 教員・生徒・スタッフ…
- 教育には**準備**が必要です！
- Taking education seriously... It is a global issue!

(スライド4)

## FFP応募

本エントリーされた動機について、200字程度でお聞かせください。\*

※定員を超えた場合、選考の基準となります。

本年博士課程の最終学年となり、TAや単発の講義を行う機会も増えたこと、また、来年度以降**大学教員としてのキャリア**を目指していることから、**授業実施に向けた実践的な知識やスキル**に習熟する必要性を痛感しております。東大FFPについては、**複数の修了者に薦めていただき**、必ず履修したいと考えておりました。東大FFPにて、多様な専門領域の受講生と共によりよい教育法について実践を通じて学び合い、教育者として成長するとともに、修了後も探求を続け、**東大FFPの発展と深化**に貢献したいと思います。

(スライド5)

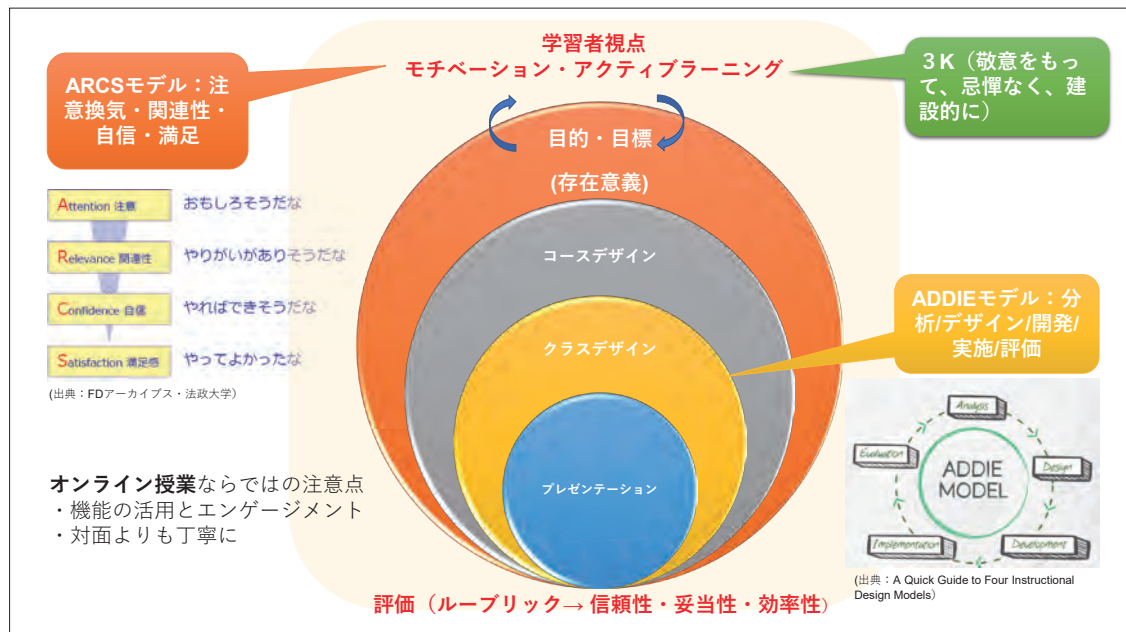
## FFP応募!

自分の研究について他分野の人にわかるように200字程度で説明して下さい。\*

※定員を超えた場合、選考の基準となります。

私が現在従事しているのは、国際法・規範の内面化に関する研究です。国際場裏で形成されたグローバルな規範が国内に適用され、ローカルな文脈に浸透していく過程には、裁判上の編入、立法上の具体化、あるいは執行上の受容に加え、国内において人々がその規範遵守を当然と考えることなど様々なレベルがありますが、私は国際的規範と国内の制度や文化・規範との衝突をいかに解決していくのか、という点に着目し、政治・司法過程のみならず、市民の社会運動の相互作用に注目して社会学的な分析を行っています。

(スライド6)





(スライド7)

## 教えるを学ぶ、学ぶを学ぶ

### ガニエの9教授事象

| Step                                    | Action                                            |
|-----------------------------------------|---------------------------------------------------|
| <b>Step 1 導入</b><br>新しい学習への準備を整える       | 1. 学習者の注意を喚起する<br>2. 授業の目標を知らせる<br>3. 前提条件を思い出させる |
| <b>Step 2 情報開示</b><br>新しいことに触れる         | 4. 新しい事項を提示する<br>5. 学習の指針を与える                     |
| <b>Step 3 学習活動</b><br>自分のものにする          | 6. 練習の機会を作る<br>7. フィードバックを与える                     |
| <b>Step 4 まとめ</b><br>出来具合を確かめ、忘れないようにする | 8. 学習の成果を評価する<br>9. 保持と転移を高める                     |

(出典：Sunlight Human TDMC)

- トライ＆ポリッシュ
- マトリョーシカ入れ子構造
- 教え方を学ぶだけでなく、他の参加者から学ぶ姿勢を学ぶ



(スライド8)



## 英国でも応用！

- Active/Interactive Teaching/Leaning  
E.g. Think Pair Share
- Evaluation
- 3K（敬意をもって、忌憚なく、建設的に）
- FFPコミュニティエンゲイジメント・サポーター継続

出典：発表者、Oxford PIL website: <https://www.law.ox.ac.uk/pil-research-seminars>



(スライド9)



東京大学  
大学総合教育研究センター  
Center for Research and Development of Higher Education  
The University of Tokyo

**A Big Thank you and Happy 10th Anniversary!**  
**All the Best for the Future of UTokyo FFP!!**

院生・教職員対象「今の考え方を学ぶ」全学プログラム

**「大学で  
教える」  
を学ぼう。**



**UTokyo**  
**FFP**  
Future Faculty Program

日本語

**2023年度 東大FFP21期  
受講者募集受付  
4月10日(月)午前9時 締切**

### 〔招待講演 3〕

## 「大学で教えて」学んだこと

目白大学 メディア学部メディア学科 准教授  
勝野 正博

(スライド1)

10 周年、おめでとうございます。修了生 954 名の中で、僕でいいのかと思うところもありますが、『大学で教えて』学んだこと』と題してお話しします。

写真は、大学の学級崩壊ではありません。現場が対面になると、学生のコンディションも様々でした。みんな素直ないい子たちです。とはいえ、どう講義に引き込むか、毎回、知恵と工夫が必要で、こちらが学ぶことも多々ありましたので、最初に教室の雰囲気を紹介しました。

(スライド2)

FFP14 期生です。当時、学際情報学府博士課程の社会人院生でした。ゼミの同期が 13 期を受けて「とっても良いですよ」と推薦されました。翌春に非常勤が決まっていまして、それなりにやれると思っていました。実際に FFP を受講してみると、まさに目ウロコでしたね。本当に履修して良かったと思います。その後も模擬授業のお手伝いに参加するようにしていますので、FFP には結構、思い入れがありますね。

2021 年に目白大学メディア学部の専任教員になりました。目白大学ではゼミは 1 学年 10 名です。僕は今、2 学年 20 名のゼミ、選択科目で 30 から 50 人ぐらい、必修科目は、先ほどの大教室で 150 人ぐらいの講義を持っています。

今日は、僕が教えたことで学んだことを、3 点お話ししたいと思います。

(スライド3)

まず、学びの姿勢です。受動的な学生が多いと思います。東大と普通の大学では圧倒的な差があるわけで、FFP に来ている人達と同じような感覚では物事が進まない。やる気のない学生もいますが、それだけではなく、教員の講義方法とのミスマッチがあるんですね。学生の「知りたい」に対して教員の「教えたい」ことにギャップがあります。やはり、90 分間一方通行の講義が多いんですね。これでは、受動的にならざるを得ないと感じました。メディア学部の卒業要件 124 単位には、色々な講義があります。学生からすれば、メディアを学ぶのに必要なのか、疑問のあるまま受講することもあるようです。この受け身な人たちに大学で教えるということに考えさせられました。

(スライド4)

僕は、学生ファーストだと考えています。とにかく学生を学びに能動的にしてあげたいと思いました。僕の教えたいことではなく、学生の知りたいこと、興味関心を中心に講義をすすめるように心がけています。そこで、90 分の講義の中で学生の裁量を拡大しようとしています。1 年から 4 年まで講義を持つようになったので、自分の中で、学生の興味・関心と教えるべきことをどう一致させていくか。小さなカリキュラムツリーを組み立てるように考えています。

(スライド5)

次に、受動的と言っても、学生は興味関心事には食いつくことを経験しました。僕はメディアが専門です。新たなメディアを学ぶということで、メタバースを授業で取り上げました。色々説明していても、みんな、ぼうっと聞いているだけですが、その後、スマホにアプリを落として、クラスターというプラットフォームで、「バーチャル渋谷に集合して記念写真を撮る」とやると、みんな必死でたどり着いたりして、わいわいやっているわけです。こちらの集中度は全然違いました。(笑)

(スライド6)

そのような実践からもう一度、知識取得に戻すことが重要です。講義の構成は基本的に、まずアウトプット。発話させたり回答させたり、雑談でも良いと思います。次にインプット。なるべく分かりやすく食いつきやすいように工夫します。そして、最後にもう一度、アウトプットを行う。これを毎回バランスよく混ぜるようにしています。

学生には、ワークも指示通りではなく能動的に動いてほしい。できれば脳みそも使わせたいので、どう「脳動」させるか。FFPを振り返りながら、インプットの次にアウトプットさせるようにしています。

(スライド7)

最後に、2月18日に、UoC（広告会社の研究機関）と目白大学で「創造的思考力」を育成するためのワークショップを行いました。学生は、普段の教室とは全く異なる環境であるUoCのスタジオで行いました。環境を変えることで学びに対する姿勢も変わります。課題は提示しますが、学生が主体的にアイデアを考えるようにワークを設計しました。

(スライド8)

これは目白大学の社会連携プログラムの一環で行ったものです。大学に閉じることなく、企業の研究機関と連携し、講義だけでは提供できない、実践的な学びの機会を提供しました。

受動的な学生に対する取り組みとしてようやく一つの形ができたと思っています。

自分が教えたメディアの知識で講義するのではなく、学生の創造的な思考力を育成するという大きなフレームの下に、学生の興味関心事とそれに対してメディアで何が出来るのか、という文脈で教えるようにしました。外部の力も借りながら、柔軟に教育プログラムを考え、進めています。FFPの学びを実践することで、少しずつ自分のものになってきていると思います。理屈だけではなく、やはり実践しないと身につかないと思った次第です。

(スライド9)

学生には「協働」と「共創」、1人で学ぶのではなく、多くの人と学び自分の知識を広げる、思考力も鍛えられるということを伝えたい。これからもFFPの学びを実践で鍛えていこうと思います。

栗田先生、皆さん大変お世話になりました。引き続き、僕も何らかに関わりながら、自分の能力も磨いていきたいと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました。

(スライド1)

2023.2.27



「大学で  
教えて」  
学んだこと。

勝野正博

1

(スライド2)

2023.2.27



院生・教職員対象「今の考え方を学ぶ」全学プログラム

「大学で  
教える」  
を学ぼう。

- ◎FFP14期生(2019)
  - ・学際情報学府博士課程
  - ・広告会社勤務
  - ・社会人院生
- ◎目白大学教員(2021)
  - ・ゼミ10名
  - ・選択30-50名
  - ・必修150名

2

(スライド3)

## | 学んだこと-1

### ◎**受動的**な学生たち

- ・学生の知りたい ⇔ 教員の教えたい
- ・90分 ⇔ 一方通行講義
- ・124単位 ⇔ 卒業要件

大学で教えるとは

5

(スライド4)

## | 学んだこと-1

## 学生ファースト

### ◎**能動的**な学生へ

- ・学生の知りたい ▶ 興味関心を中心に
- ・90分 ▶ 学生の裁量を拡大
- ・124単位 ▶ カリキュラムツリー



(スライド5)



(スライド6)

## | 学んだこと-2

### ◎興味/関心事には食いつく

まず, アウトプット : 発話, 回答, 雑談

次に, インプット : 文献, 事例, 調べ物

再び, アウトプット : 共有, 発表, 質問

能動から脳動へ



(スライド7)



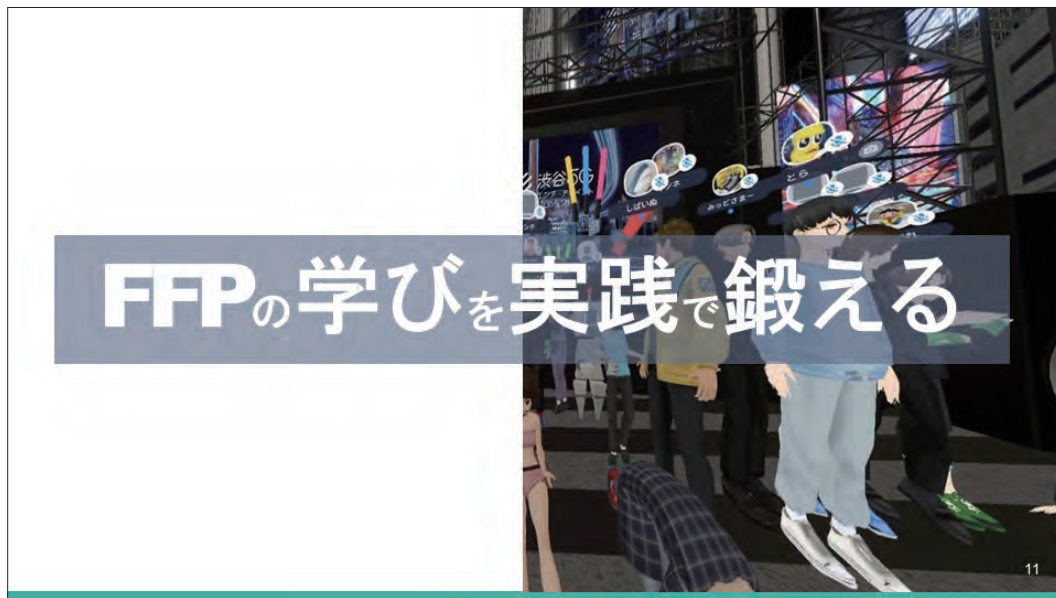
(スライド8)

## | 学んだこと-3

- ◎社会連携プログラムの導入  
創造的思考力の育成を目指して、  
企業・行政などと連携し、  
講義だけでは提供出来ない、  
実践的な学びの場を提供する

協働と共創へ

(スライド9)



## [招待講演 4]

### 東大 FFP のさらなる発展への期待

名古屋大学 高等教育研究センター 教授  
加藤 真紀

(スライド 1)

今日は「東大 FFP のさらなる発展への期待」と題してお話をしたいと思います。

(スライド 2)

まず、自己紹介ですけれども、私自身は 2021 年度の東大 FFP、第 17 期ですね、こちらにオブザーバーとして参加させて頂きました。この時は、オンラインで実施されておりました。同年、現所属に着任を致しまして、色々な業務があるのですけれども、大きなウェイトを占めているのが大学院生や若手教員、若手といってもアーリーキャリアなのですけれども、に、教授法を教えるというものでございます。主なものとして三つありますが、一つは大学教員準備講座、いわゆる FFP ですね。名大では大学教員論という授業で開講していますけれども、4 人で教えているうちの一人として担当しております。こちらの名大の FFP テキストは 2010 年出版のもので少し古いのですけれども、改訂しようねと言い続けて今に至っているものでございます。

それから、名大では大学院生が授業を 1 コマ 2 コマ持てるという制度がありまして、そこでは部局から推薦を受けて研修を受けたら授業を担当出来るということになっており、その研修を行うセンターの長を務めております。また、新任教員研修で大学の紹介だけではなく教授法も学ぶという FD を実施するというようになっておりますので、そのようなものも担当しております。

総じて、大学院生、若手教員に教授法を教えるということをしなくてはならないのですけれども、実は私の専門は、これのど真ん中ではないのですね。そこで、どうしようかと思っていた時に、他大学ではどう行っているのだろうと調べまして、やはりまずはホームページから当たるのですけれども、なかなか外からは分かりづらかったのですが、その折に東大 FFP のオブザーバーに関するメールを頂きまして、非常に幸いということで参加させて頂きました。

(スライド 3)

オブザーバーに参加して気付いたことは幾つかございます。まず一つ、オブザーバーの受け入れということ自体が、他には類を見ないようなことではなかったかと思います。このこと自体が、そもそも東大 FFP の立ち位置、先導するプログラムということを示しているのではないかと思います。また内容、実績共に、もうすぐ 1000 名という数だと思いますけれども、日本を代表する FFP のモデルということを実感致しました。

私は最初オブザーバーと聞いた時に、小学校中学校の授業参観のように後ろで見ているイメージだったのですけれども、そうではなくて、自分でもやりたければ参加出来るということで、殆ど参加させて頂きました。学生さんたちが学ぶように学ぶことで、非常に多くの気付きがありました。それ以降、名大の FFP を考える際にも、ベンチマークとして東大 FFP ではこのようにやっていたな、ということを常に思

い描くようなプログラムだったと思います。

また、今年度に入って日本の FFP を実施している大学を幾つか訪問しておりますけれども、そこでもやはり東大 FFP の存在感は非常に大きなものと感じております。特筆すべき点としては、これまでも栗田先生のお話などにありましたが、活発な Alumni 活動にあるのではないかと思います。これらは全て、栗田先生始めとした先生方、スタッフの皆さま関係者のご尽力のおかげだと思っております。本日は、本当におめでとうございます。

(スライド4)

それでは、東大 FFP による日本の高等教育へのインパクトということについて、私自身、考えたことをお話ししたいと思います。修了と、こちらの意識変容、そして行動変容ということで、今までもお話がありましたけれども、修了後のマインドセットの変化があるだろうと。それから提案、ということで教育コミュニティの形成ということについて少しお話させていただきます。

(スライド5)

FFP の修了生が増えることで、教育を重視する、重視しないまでも少なくとも基礎の分かる教員が増えるということになると思います。ただ、FFP 修了生が多分に大学教員になる率というのは通常より高いのではないということも考えられます。それは、大学教員の採用においても模擬授業が問われ始めているということからも見る事が出来ます。こちらのデータなのですけれども、3月に、in press になっていますが、公開される予定の論文に出しているものです。JREC-IN のデータベースからそれぞれの年、20 年間でですね、2001 年から 2020 年までの公募情報のうち、シラバスと模擬授業、それから両方を求めているのであろう公募を抜き出したものです。どんどん増えておりまして、最近だと、大体4分の1の公募で、主に模擬授業が求められているということが分かります。もちろん、大学によっても違いますし、それから分野によっても大きな違いはあるんですけれども、総じて模擬授業が非常に重視されているということが分かります。

(スライド6)

また、もう一つ、東大 FFP に参加をして、非常に緻密に設計される完成度の高いプログラムだということを感じたのですけれども、それに対して、あえて何かを提案するなら、ということで、教育コミュニティの形成ということがあるのではないかと思います。今も活発なコミュニティ活動ですけれども、大学教員になった後で、それぞれ分野別の教育コミュニティとして発展していくことは出来ないかと考えた次第です。

実は、名大でもここは出来ていないのでお知恵を拝借出来ればということもあるのですが、現在は分野別の教育コミュニティを、研究会として我々の方では支援しています。非常に大きなものでは物理学教育。物理学を、どのように学部生、特に1年生に分からせるかということで、教え方についてかなり活発な議論と探求が行われています。

他にも、哲学や経済学教育の研究会があるのですけれども、経済学教育は教育実践だけを行っているのではなく、少し変わっているのですが、参加する先生方の興味のあるテーマについて、お茶を飲みながら研究会を実施しています。例えば、教科書市場のオンライン化、それから学部1年生の授業で ChatGPT をどのように活用するのか、学生の質問から経済学教育を考える、などを行っております。ただ、今のと



---

ころ、まだ FFP とのつながりはないというところで、ここを何とかしたいなと考えております。ぜひ、東大の Alumni の皆さまとも連携が出来れば良いのではないかと思う次第です。

(スライド7)

最後になりますけれども、10 年の節目において、東大 FFP のさらなる発展を期待、祈念しております。私からは以上です。ありがとうございました。

(スライド1)



(スライド2)

## 自己紹介

- 2021年度の東大FFP 第17期  
オブザーバー オンライン参加
- 2021年度に現所属に着任
  - 大学教員準備講座 (FFP) (大学教員論)
  - QTA・GSIトレーニングセンター長：  
大学院生による授業実施のための研修実施
  - 新任教員研修担当

→ 大学院生・若手教員に教授法を教える

大学教員準備講座  
加藤真紀 著  
2010年出版

名大のFFPテキスト 2010出版



(スライド3)

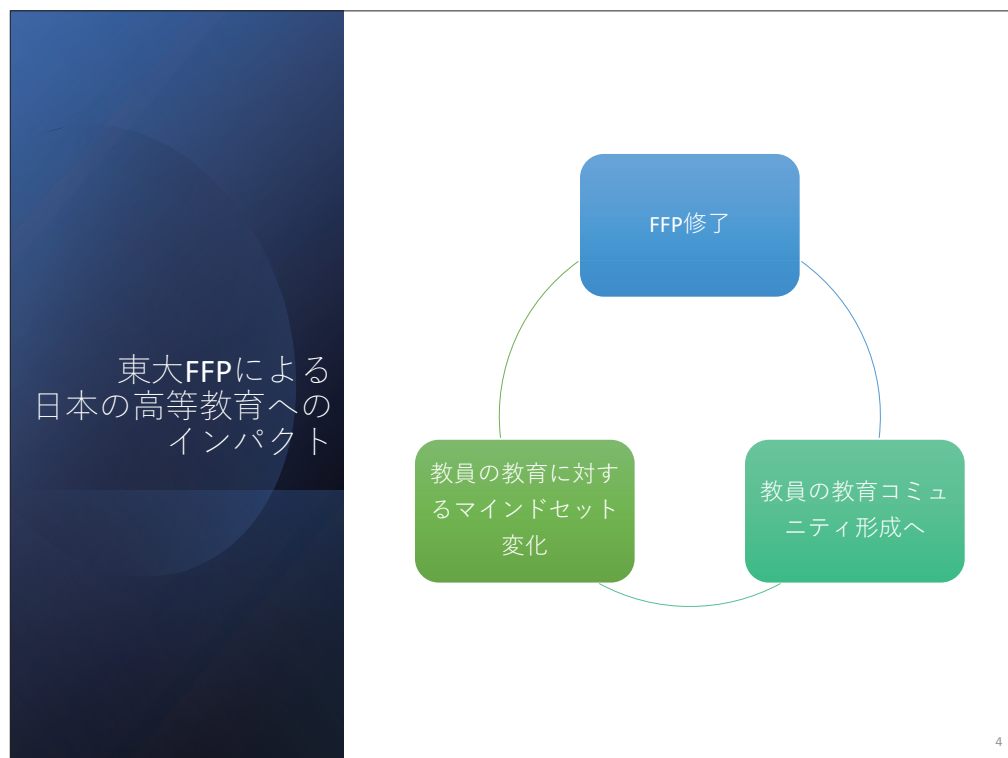
## 東大FFPにオブザーバー参加をして

- オブザーバーの受け入れが類を見ない
- 内容実績ともに日本を代表するFFPのモデル
  - 名大のベンチマークとして
  - 日本の大学訪問調査でも実感
- 活発なAlumni活動
- 栗田先生をはじめとした東大FFP関係者のご尽力



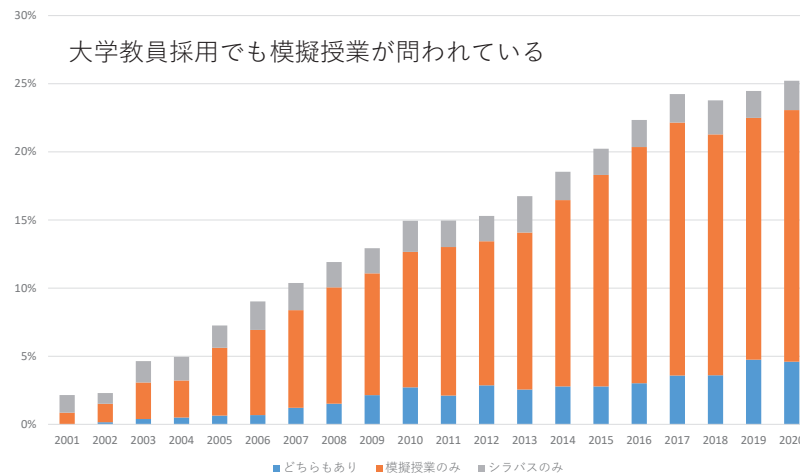
3

(スライド4)



(スライド5)

## 教員のマインドセット変化（教育を重視する教員の増加）← FFP修了生の増加



加藤真紀(2023)大学教員に求められる教育力: JREC-IN公募データによる把握の試み 「名古屋高等教育研究」23号 in press <sup>5</sup>

(スライド6)

## 敢えて提案するのなら 教員の教育コミュニティ形成

### ■ 東大FFP修了生の活発なコミュニティ

→ 教員になってからも継続を

### ■ 名大：分野別の教育コミュニティを研究会として支援

物理学教育、哲学教育、経済学教育など

#### ➤ 経済学教育研究会のテーマ

- ・ 教科書市場のオンライン化
- ・ 学部1年生授業でのChatGPT活用
- ・ 学生の質問から経済学教育を考える

※ ただしFFPとのつながりが未だない

(スライド7)

最後に

10年の節目において、  
東大FFPのさらなる発展  
を期待、祈念

7

## [パネルディスカッション]

司会進行

東京大学 大学総合教育研究センター 副センター長

栗田 佳代子

栗田： では、パネルディスカッションに移りたいと思います。画面共有をしながら、まずは slido に寄せられている質問から順番にお話を聞いていきたいと思います。私の方からご意見をお伺いしますが、パネリストの方々、榊原先生、波多野さん、勝野さん、加藤先生、そして浅見センター長、ご自由に横からでも「私はこう思います」のように入って頂ければと思います。

最初に、医学教育センター、日大の医学教育センター、ジエーゴ先生からです。昨年の冬からすごく話題になっている ChatGPT というオープン AI について。AI に何かを言うと何でも答えてくれるというもので、レポート課題などは非常に影響を受けるかもしれません。良い方向にも悪い方向にも大きなインパクトを与えるということで、今、非常に、現場が追い付いてない状況にあると思うのです。それについて日本の大学では、この ChatGPT をはじめとする AI の扱いについては何かポリシーとかはあるのでしょうか？ということで、浅見センター長に、本学としてどのような方針があるか、あるいはセンターとしてどう取り組むべきか、個人的に取り組むのか、大学として取り組むのか、どちらでも結構なのですが、お伺いしたいと思っています、いかがでしょうか？

浅見： 日本語で大丈夫ですか？

栗田： はい、大丈夫です。

浅見： 大変重要な論点をご提供頂きました。どうもありがとうございます。実は東大でも、ちょうどこれについてディスカッションを始めたところでございまして、今度、少し重点的に検討することになっております。確かに、おっしゃったとおり、これは大きく教育現場を変える可能性があると思います。つまり、答えがあること、知識を問うような問題は全て、場合によっては、このような AI に聞いてしまえば答えが出てきてしまうことになります。

実際、学生に聞いても、「たまに間違えるけどね」みたいなことを言っているもので、完全に正解であるとは限らないのですが、ただ、もっともらしい答えを出してしまうということもあります。そのような意味で言いますと、例えばこれまで出してきたレポートの課題のようなものは、必ずしも適切ではない可能性があるということになりまして、それについては大きく変換が求められるように思います。

一方で、知識を教えるものについては場合によっては一部、省略して、もっと考え方を教えるような方向に教育を変えていく可能性があるのかなと思います。いずれにせよ、これから検討しようとしておりますので、また何か成果が出たら、機会があれば公表したいと思っています。以上です。

栗田： ありがとうございます。他の大学、例えば加藤先生のところや榊原先生のところ、勝野さん、波多野さんのご所属、あるいはフロアの皆さまにおかれましても、ChatGPT について何か決まったことはありますでしょうか？

加藤： すみません、よろしいでしょうか。多分、決まっていない段階だとは思いますが、議論はやはり教員レベルで行っていきまして、組織レベルでの決定が必要という話になっています。少し宣伝めしてしまうのですが、4月に入ってから、我々のセンターでも AI 系の教員がいますので、セミナーを行いたいと思っています。ぜひ、ご関心がありましたらご参加頂ければと思います。ありがとうございます。

栗田： ありがとうございます。よろしければ加藤先生、チャットに貼って頂けると、皆さんがアクセス出来るかと。

加藤： ありがとうございます。まだ整備が出来ていないので、出来ましたらご案内させていただきます。

栗田： アメリカのFDのメーリングリストでも、去年の秋、冬ぐらいに、ChatGPT は最初はどうやってそれを見破るか、や、学生に使わせたら危険過ぎる、あるいはサボるのではないか、など、ネガティブな投稿が最初は多かったのですが、最近はもっと、これはむしろ使っていかなければという意見や、これを使って教員もむしろ楽になっていく、などの「ポジティブに、一緒に生きていかなきゃね」みたいな感じの論調に変わってきているように思います。トピックを見ているとそういう印象が見受けられます。

「包丁は危ないから使わない」ではなく、どのように使っていくかというようなことかなと私は思っていますが、いずれにしても、とてもインパクトが大きく、非常に重要なトピックだと思います。ただ、私はFDの研修に一昨日行ったのですが、まだまだ現場の先生レベルでも知らない方が多かったもので、私たちが知らなくても、むしろ子ども、学生さんや生徒さん達の方がよく知っている状態になりそうです。すごく大事なテーマだなと思います。ありがとうございます。

他にはよろしいですか？

続いて、裏方の話が今回の話では漏れていたもので、取り上げたいと思っています。運営上、私たちは授業をする側で、いわゆる表舞台にいるわけですが、裏でもとても色々なことが動いていて、FFPを運営する上でどのようなことが背後で行われているかということを苦労話も含めてご披露しようと思っています。

FFPのスタッフは、私以外に朴先生と、鍋田さんという研究支援員の方がいて、あと会計担当に吉野さんという方がいらっしゃるのですが、鍋田さんが一番、受講者の方々に近いところでやりとりをしていきまして、宜しければ鍋田さん、どのようなことを行っているか、どのような工夫をしているか、などご自由に語って頂けないでしょうか？

鍋田： 裏方の鍋田です。お世話になっております。皆さん、ありがとうございます。

裏で行っていることと言いますか、今回もチャットに貼らせて頂いていますけれど、オンラインの授業の場合、栗田先生の授業進行に合わせて必要な情報をチャットで結構な数、送っています。大体は栗田先生から事前に頂いていますので、それを見ながら送っています。また、授業の目的や目標がすごく明確なので、それに応じて、あとは何が必要なのだろうということを、僕はずっと高校の教員をやっていたこともあって、僕なりに自分で考えて必要なものを適宜、送るようにしています。

一番大変なことは、模擬授業ですね。修了生の方達に連絡をして、毎回参加して頂きます。グループ分けが複雑なので、かなり人数が必要になってくるのですけれども、皆さん積極的に参加して頂いています。勝野先生や波多野さんは、毎回ほんとご連絡を頂けるので非常に助かっております。

そのような方達の支援があって実施出来ている部分が非常に大きいので、連絡関連についても担当しております。また、修了証や履修証の授与式の時も、色々とお話して頂きます。皆さんに Alumni のメーリングリストに入って頂いており、先ほどセンター長から修了生が 954 名とお話がありましたけれど、オブザーバーの方も含めて皆さんと連絡を取り合っています。色々支援をして頂いているのが非常に大きいかと思っています。

また、先ほど話にのぼった図書館ミニレクチャや、外部への連絡などが多少ありますけれども、どちらかという大変なことはあまりありません。最初の 1 回目のお手伝いをした時に栗田先生から「鍋田さんどう？」と尋ねられ、「私の授業を仕事しながら聞けるなんていいでしょ」とおっしゃられて、「言うなあ」と思いましたけれども、本当に中身はとてもよく出来ていて、僕は 30 年ぐらい高校の教員を務めていたのですが、自分の授業でやってきたことが理論的に裏付けられ、分かってないこともたくさんあったことに気づけたので、裏方ではありますが、裏でいつも学んでいるという状況です。こんな感じでよろしいでしょうか。

栗田： ありがとうございます。あまり言った記憶はないのですけれども（笑）プレ FD を行っていらっしゃる榊原先生のところでは、何か裏方的な部分でご苦労とかございますでしょうか？もしよろしければ。

榊原： 東大は競争率が 1.3 倍だというお話がありましたが、必要なところに、FFP が開かれるという情報を届けることがとても難しいです。例えば、日本で一番大きなメーリングリスト、チューリップメーリングリストだと思いますけれども、そこに流しても、そこを見ているのはそもそも FD に興味があるからそこに登録している人であって、そうではない人は登録していないわけですね。そうすると、チャンネルがなかなか無い。本当に色々なチャンネルを探しましたが、なかなか最適解はまだ見つからない。それが一番の苦労だと思います。

栗田： そうですね。FFP の 2013 年の開始当初は、学内の院生に知ってもらうことが本当に大変でした。今でも私達は行っているのですが、駅貼りポスター、地下鉄駅にポスターを貼っているのです。そうでもしないと、隅々にまで大学院生が知ってくれているという状態を作れなくて苦労しています。オンライン講座のインタラクティブ・ティーチングの方は、Coursera で配信していますが、なかなか伝わらないこともあり、実は今年は、小中高の先生方にも届けられるのではないかとということで、パンフレットを都



道府県の教育委員会に配りました。これを配ってくださいとお手紙を添えて。そうすると、この1、2週間で受講者がどっと増えました。届けたいところに情報が届いてない、そのフローは学内でも学外でも、いいものを行っているだけでは知れないのです。その辺りは本当に難しいところだなと思いました。ポスターで知りましたとチャットに書いて頂いた、カタヤマフミオさん、ありがとうございます。

榊原： いいですか？

栗田： どうぞ。

榊原： 体感でしかないのですが、結局は、東大で言えば Alumni、本学であれば受講した人の口コミが一番強烈なのかなというのが体感した結果ですね。

栗田： そうですね。本当に口コミで広まりもするし廃れもするので、最終的には内容の良さをずっと続けていくしかないのですが、それは本当に重要な点で本質的なところだと思います。関連して、最新の質問でリソースの確保について、センター長、いかがでしょうか。

お金と人の確保について。

浅見： 何度もFDは重要だと申し上げているので、全学でも色々ご理解頂き、リソースを付けて頂いているという状況です。実は、FDは重要なのですが、一方で、FDを強調し過ぎると若干、自分たちの負担が増えるのではないかと先生方が思う可能性があって、伝え方が少し難しい部分もあるように思っています。ですので、FDを行うことで如何に効率的になるのか、むしろ長期的に見ればご負担が減ることなど、そのようなことをうまく伝えることを考えつつ、日々、色々リソース確保に努めているという状況でございます。

栗田： ありがとうございます。学内的にはコロナを経て少し、「このような取り組みは大事だ」と思っている感触はありますが、引き続きそのような重要性を学内にも訴えていきたいと思ひますし、学外にも展開出来れば良いと思ひているところです。

では、続きまして、FFPで育てている力と大学教員の公募における模擬授業の評価基準が異なるかもしれないという質問なのですが、これはどうでしょう？評価基準を変えていくというより、私達としては、学生さんが主体的に学べるような場を作るという目的が一番にあるので、それで採用してくれない大学はそこまでなのではないかと。それぐらいでないと（笑）私達としては、そちらに迎合する必要はないと思ひています。私は修了式、履修証授与式の時に、修了された方々に「全員が学長になれば高等教育は変わりますよね」と、いつも1期からずっと言っているのですが、それを実現するには本当に20年や30年といったスパンで考えることが必要かなと思ひています。

その辺りは、佐藤先生、振ってもいいでしょうか？大阪大学の佐藤浩章先生に本日ご参加頂いているので。模擬授業における評価基準が、FFPで育てている力とずれている場合に、評価基準側を変えていく

には、ということについて。結局、私の答えは、私達が育てていくといいますか、修了した方がじわじわと力を発揮して変えてくれるという長期スパンのことを考えているわけですが、政策的にあるいはこうした方がもっと早く変わるといったアイデアなどはございますか？

佐藤： 大学教員の公募における条件や基準はこれまでの慣行で作られているわけですね。それを大きく変えるということは、何もしなければ普通は起こらないわけです。しかし、やはり今寄せられたような指摘があります。認知的な不協和はいずれ解消されていくと思います。つまり、私たちが育てているプレFD プログラムがこれだけ広がっている一方で、その修了生を引き受ける大学側の認識がずれている場合、大学の教員であれば、そういう不協和は嫌なわけで、どこかでこの慣行を変えていこうという話になると思います。

大阪大学では新任教員には30時間の必須研修プログラムがあるのですが、そちらとプレFD プログラムの接続を行いました。プレFD 修了者が、もし阪大に採用された場合は、一部研修を免除する形で接続を図っています。今後はプレFD と新任教員研修との接続が各大学で進んでいく。その流れの中で、ここに不協和があることが気づかれると思います。

申し遅れましたけれども、東大プレFD、10周年おめでとうございます。浅見センター長、栗田副センター長始め、大総センターの皆さまのこれまでの活動に敬意を表したいと思います。

栗田： 佐藤先生、ありがとうございます。

浅見： 栗田先生、1点、よろしいですか。

栗田： どうぞ。

浅見： 最近、大学の教育改革の話が色々とされている中で、マイクロクレデンシャルを普及するべきではないかという話がございます。今はまだそれほど普及していない状況ではあるのですが、FDについても今後、積極的にマイクロクレデンシャルを発行していくということになると、場合によってはFDに関連するマイクロクレデンシャルを持っていることが、公募の一つの推奨要件、ぐらいでしょうかね、必須要件というとなかなか難しいかもしれませんが、推奨要件ぐらいにはなると思うのですね。

そうすると、結構、大きく変わってくと思うのです。ですので、マイクロクレデンシャルの普及は一つ、可能性としてあり得るのかなと思って発言させて頂きました。

栗田： ありがとうございます。オープンバッジや、一つの大学に限らない資格といいますか、パフォーマンスの証明ということを大学として行っていくことは今後、重要だと思います。私は前職が質保証機関でしたので、そのようなカリキュラムについての質の担保といったことを、今後は横連携といいますか、そのような形で行っていけると良いのかなと思います。東大としても取り組んでいけるところだと思いますが、その為には、人もお金も要るので、よろしくお願いします（笑）。

榊原： よろしいですか。

栗田： どうぞ。

榊原： 大学全部をひとくくりに話すことは出来ませんが、例えば、教育により投資をしたい私立大学や、専門職大学の先生方は教育力の向上にかなり苦勞されていると思います。あとは高等専門学校の先生方ですね。そのようなところでは公募の時にどのようなトレーニングを受けたかとかいうことを、徐々に見るようになってきていると思います。また、採用・公募面接の時にもそのようなことを重視した目で見えるように、徐々になってきていると思います。

一様にそれが成るには、まだ20年30年かかるかもしれませんが、特に私立大学は生き残りがかかっているんで、あまり悲觀的に考えずに、これから公募する方々に、ぜひ教育のトレーニングにも励んで頂ければと思います。

栗田： ありがとうございます。私は少し前に専修学校の質保証機関のシンポジウムに行きましたけれども、教え方についての教育力がどこの教育機関でも重要になってきているように感じました。その辺りは大学だけでなく、むしろ大学が遅れているかもしれない。実務家教員の育成などもありますけれども、そのようなものが一体になって、もっと推進していかないといけないところではありますよね。ありがとうございます。

すみません、あと残すところ2分ほどとなりましたので、頂いた質問に全て答えきれておりませんが、私たちの方で答えられるところは答えておきます。ですのでslidoをチャットに今一度貼りますので、そちらのリンクを覚えておいて頂ければと思います。週明けぐらいまでには全部答えておきたいと思いますので、ご質問がある方は、どうぞこちらに残して頂ければと思います。では、朴さんにお返しします。

朴： ありがとうございます。短い時間が大変残念ではありますが、時間になりましたので、閉会のご挨拶に移りたいと思います。残された議論や情報共有についてはslidoの方を引き続きご活用頂ければと思います。先ほど、波多野さんにもご紹介頂きましたが、4月より第21期の東大FFPが走る予定ですので、ぜひ周りの方々にもご紹介頂けますと幸いです。

最後のお願いになりますが、終了後にアンケートをメールでお送りする予定です。ご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します。皆さま、本日はお忙しいところご参加頂き、誠にありがとうございました。これからも引き続き、東大FFPをよろしくお願い致します。ありがとうございました。

栗田： ありがとうございました。

## 東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）の沿革

- 2008 年 4 月 大学設置基準改正に伴い FD（Faculty Development）が義務化される
- 2011 年 6 月 東京大学中期的ビジョン「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」  
（平成 23 年度改訂版）において「教員の職能開発（FD）の実施方針の策定と効果的な推進」  
が明記される
- 2012 年 9 月 「東京大学のファカルティ・ディベロップメント（FD）の基本方針」策定
- 2013 年 4 月 東京大学フューチャーファカルティプログラム開講 第 1 期開始  
同内容を正規履修科目「大学教育開発論」としても開講、提供開始
- 2013 年 12 月 「卓越した大学教員を全ての教室に」事業の一環として、大阪大学教育学習支援センター  
と FFP 教材の開発等において連携開始  
以降、阪大 FFP の立ち上げに協力
- 2014 年 3 月 聖路加国際大学のフューチャーナースファカルティプログラム（2013–2015 年度）にお  
ける「教育学セミナー」の設計・実施に協力
- 2014 年 11 月 東大 FFP のコンテンツに基づいた MOOC（Massive Open Online Courses）講座「イン  
タラクティブ・ティーチング」を国内 MOOC プラットフォーム「gacco」において開講（2016  
年 9 月迄）
- 2017 年 2 月 書籍「インタラクティブ・ティーチング」を刊行
- 2019 年 8 月 大学設置基準改正に伴い大学院博士課程におけるプレ FD の実施ないしその情報提供が  
努力義務化される
- 2019 年 12 月 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）第一例の症例報告  
以降、感染者数が急速に拡大、蔓延する
- 2020 年 3 月 COVID-19 蔓延への対策として、本学における授業のオンライン実施が決定
- 2020 年 4 月 東大 FFP のオンライン形式への切り替えが完了。第 15 期開始
- 2021 年 4 月 「インタラクティブ・ティーチング」を国際的 MOOC プラットフォームである Coursera  
で開講
- 2021 年 12 月 国際シンポジウム「Future Faculty Development」開催
- 2022 年 4 月 グローバル化に対応した東大 FFP として英語によるプログラムである UTokyo Global  
FFDP（The University of Tokyo Global Future Faculty Development Program）を開講
- 2023 年 3 月 第 20 期修了生 履修証授与式
- 2023 年 3 月 東大 FFP10 周年記念シンポジウム開催
- 2023 年 3 月 グローバル化対応の第 2 弾として、英語による FD ワークショップセミナー「UTokyo  
FD Open（東京大学ファカルティ・ディベロップメント・オープン）」を開始
- 2023 年 4 月 第 21 期開始

## (付録) 修了生フォローアップ調査質問紙

### 2022 年度 東大 FFP 修了生フォローアップ調査 「東大 FFP 修了生フォローアップ調査」へのご協力をお願い

東大 FFP が 10 年目の節目を迎えた今、これまでの取り組みを改めて振り返り、修了生の方々の多様な視点を通して、プログラムの効果を検証したいと考えています。

従って、本アンケートは、これまで東大 FFP を修了され、アラムナイに加入されている方を対象としており、1 人でも多くの方のご意見を聞かせていただきたいと思います。

もしご不明な点がございましたら、どうぞご遠慮なく担当者にお問い合わせください。

※/切：2023 年 1 月 22 日（1 週間延長しています）

#### 1. 研究の概要

研究課題「東大 FFP 修了生フォローアップ調査」

##### ◎研究責任者氏名・所属・職名

- ・栗田佳代子 東京大学大学総合教育研究センター・教授

##### ◎研究従事者氏名・所属・職名

- ・朴源花 東京大学大学総合教育研究センター・助教
- ・瀬崎颯斗 東京大学大学院新領域創成科学研究科・修士課程
- ・徐雨珊 東京大学大学院新領域創成科学研究科・修士課程
- ・雷嫣然 東京大学大学院新領域創成科学研究科・修士課程
- ・鍋田修身 東京大学大学総合教育研究センター・研究支援員

#### 2. 研究目的

本調査の主な目的としては、以下の 4 点があげられます。

- 1) FFP 修了後のキャリア形成について把握し、新たに求められるニーズを明らかにすること
- 2) FFP で学んだ学習内容が、学習後の満足度に与える影響とその要因を分析すること
- 3) それらの経年変化および持続性を明らかにすること
- 4) これらの結果から、東大 FFP のプログラム効果検証を総合的に行い、今後の教育プログラム改善に活かすこと

#### 3. 調査方法

自己記入式のアンケート調査です。アンケートには、個人情報に関する質問項目が含まれます。回答にかかる時間はおよそ 10 ～ 15 分です。



記名式で行いますが、収集したデータはセキュリティが整ったパソコンおよびクラウドで保管をするため、研究従事者以外の者が回答の内容を知ることはありません。また、分析の際には氏名などは削除し、匿名化するため、調査票の原票から個人が特定されることはありません。

#### 4. 研究協力の任意性と撤回の自由

この研究にご協力いただくかどうかは、あなたの自由意思に委ねられています。一旦ご同意いただいた後で、もし同意を撤回される場合は、下記の担当者までご連絡ください。同意撤回書をお渡しし、速やかに対応いたします。なお、研究にご協力いただけないことで、あなたの不利益に繋がることは一切ありません。

同意を撤回された場合には、アンケートの回答票、インタビュー記録等の情報及び研究結果は破棄され、以後研究に用いられることはありません。ただし、以下の場合には同意を撤回しても情報を破棄することができませんのでご理解ください。

- 調査の回答が完全に匿名化されて個人が特定できない場合
- すでにデータ解析が行われ、あなたの情報を分離して破棄することができない場合

#### 5. 個人情報の保護

研究にあたってはあなたに不利益が生じないように個人情報の保護、プライバシーの尊重に努力し最大限の注意を払います。あなたの情報から、氏名・住所・生年月日などの個人情報を取り除き、代わりに新しく符号をつけ、あなたのものであることを分らないようにした上で（匿名化）、研究に用います。あなたの個人情報を、責任を持って厳重に保管します。

#### 6. 研究成果の発表

研究の成果は、氏名など個人が特定できないようにした上で、学会発表や学術雑誌及びデータベース上等で公表します。

#### 7. 研究参加者にもたらされる利益及び不利益

この研究が、あなたに即座に有益な情報をもたらす可能性は、現在のところ低いと考えられます。しかし、この研究の成果は、今後のプレFD・FD研究の発展に寄与するための重要な基礎的成果となることが期待されています。

予想される不利益としては、一定の時間的拘束や精神的負担などが考えられます。ご負担のない範囲で進めていただき、ご不明点などありましたらご遠慮なく調査担当者までお問い合わせください。

#### 8. 資料・情報の取扱方針

あなたからいただいた試料・情報は匿名化した上、研究や分析等に用います。また、東京大学大学総合教育研究センターにおいて、この研究成果の発表後少なくとも10年間保存いたします。

提供していただいた貴重な試料・情報はあなたの同意が得られた場合に限り、新たな研究のために、当



機関で用いたり国内外の機関に提供したりする場合があります。提供の際には、回答者の情報が特定されることのないよう、匿名化した上で提供するものとします。また、改めて東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けた上で利用や提供を行います。

#### 9. あなたの費用負担

この研究に必要な費用を、あなたが負担することはありません。また、この研究に参加していただいても、謝礼などの支給がないことをご了承ください。

#### 10. その他

この研究は、東京大学倫理審査専門委員会において審査し、東京大学大学総合教育研究センター長の承認を受けて実施するものです。ご意見、ご質問などがございましたら、お気軽に下記までお寄せください。

##### 【連絡先】

- 研究責任者

東京大学大学総合教育研究センター 栗田佳代子

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 Tel: ××-××××-××××

- 研究従事者【調査担当】

東京大学大学総合教育研究センター 朴源花

××××@×××.××××××××.××.××

##### [設問1]

上記の記載事項に同意の上、本調査に協力します。

はい

いいえ

##### ～ FFP 受講時の情報～

##### [設問2]

東大 FFP を受講した時期を教えてください。

(回答選択肢)

第1期 (2013 年春)

第2期 (2013 年秋)

第3期 (2014 年春)

第4期 (2014 年秋)

第5期 (2015 年春)

第6期 (2015 年秋)

第7期 (2016 年春)

第8期（2016 年秋）  
第9期（2017 年春）  
第10期（2017 年秋）  
第11期（2018 年春）  
第12期（2018 年秋）  
第13期（2019 年春）  
第14期（2019 年秋）  
第15期（2020 年春）  
第16期（2020 年秋）  
第17期（2021 年春）  
第18期（2021 年秋）  
第19期（2022 年春）  
覚えていない

[設問3]

受講当時の身分について教えてください。

（回答選択肢）

東京大学の修士課程  
東京大学の博士課程  
東京大学の大学教員  
東京大学の大学職員  
東京大学のポストドクター  
東京大学の科目等履修生・研究生  
オブザーバー

[設問4]

日本学術振興会特別研究員（DC1、DC2、PD、SPD、RPD）の採択経験がある方はチェックをお願いします。  
受講前、受講後を含めます。

（回答選択肢）

該当しない  
該当する（DC1、DC2、PD、SPD、RPD）

～現在の情報～

[設問5]

性別

（回答選択肢）

男性  
女性

回答しない

その他：記述式テキスト

[設問6]

現在の年齢

(回答選択肢)

20代

30代

40代

50代

60代

70代以上

[設問7]

ご自身の専門分野の学科系統を教えてください。

高等教育機関以外にご所属の方は、卒業・修了時でのご認識でお答えください。専門分野の学科系統が不明な場合は、下記の学科系統分類表をご参照ください。

参考：学校基本調査 学科系統分類表

[https://drive.google.com/file/d/1YGrXD0l8LEl0MEh\\_XtEOGe8lt-C1TldB/view](https://drive.google.com/file/d/1YGrXD0l8LEl0MEh_XtEOGe8lt-C1TldB/view)

(回答選択肢)

人文科学

社会科学

理学

工学

農学

保健

商船

家政

教育

芸術

その他

[設問8]

現在の身分について教えてください。

複数の選択肢に当てはまる場合は、主たるご所属でご回答下さい

(回答選択肢)

修士課程1年

修士課程2年（または2年以上の修士課程学生）

博士課程 1 年

博士課程 2 年

博士課程 3 年

博士課程 4 年以上

大学教員（高専短大を含む）

大学職員（高専短大を含む）

ポストドクター

研究機関の研究職

小学校・中学校・高等学校、およびその特別支援等の学校の教員

一般企業

自営業・フリーランス

その他

[設問 9]

差し支えない範囲で、現在のご所属機関名（大学名・研究機関名等）を教えてください。

（回答選択肢）

記述式テキスト

[設問 10]

過去 3 年間で、1 学期を通じた授業を担当されたことはありますか（非常勤先を含む、単発の講義を除く）。

（回答選択肢）

ある

ない

[設問 11]

FFP で取り上げた次の内容は、ご自身の授業で役立っていると感じられますでしょうか。

授業実施の経験がない方は、将来授業を持った場合を想定の上、ご回答ください

1. 1 分間の研究紹介
2. アクティブ・ラーニングの方法体験
3. 6 分間クラスデザインシートの作成
4. ルーブリックの作成
5. シラバス・グラフィックシラバスの作成
6. 模擬授業検討会
7. ポスターツアー
8. 模擬授業実施と相互評価
9. SAP チャート作成

（回答選択肢）

※各項目につき、

受講していない／覚えていない

全く役に立っていない

あまり役に立っていない

どちらともいえない

どちらかというと役に立っている

とても役に立っている

[設問 12]

FFP で取り上げた次の内容は、ご自身の授業で役立っていると感じられますでしょうか。

授業実施の経験がない方は、将来授業を持った場合を想定の上、ご回答ください

10. アクティブ・ラーニングの手法

11. モチベーション

12. 評価（形成的・総括的評価、信頼性・妥当性・効率性）

13. ADDIE モデル

14. 目的・目標の明示

15. 3K（敬意をもって・忌憚なく・建設的に）

16. 他の受講生との交流

17. オンライン授業での工夫

18. 教員と受講生とのフラットな関係性

（回答選択肢）

※各項目につき、

受講していない／覚えていない

全く役に立っていない

あまり役に立っていない

どちらともいえない

どちらかというと役に立っている

とても役に立っている

[設問 13]

1-18 の学習の中で、特に教育活動に役立った（将来役立ちそうな）経験や事例について、番号を挙げていただき、詳しく教えてください。

例：1 の研究紹介の経験が、～～において役に立った（役に立ちそうである）等

（回答選択肢）

記述式テキスト

[設問 14]

1-18 の学習の中で、特に研究活動に役立った経験や事例があれば、番号を挙げていただき、詳しく教え

てください。

例：1の研究紹介の経験が、～～において役に立った 等

(回答選択肢)

記述式テキスト

～プログラム全体について～

[設問 15]

東大 FFP の満足度についてお聞かせください。

(回答選択肢)

大変満足

やや満足

どちらともいえない

やや不満

大変不満

[設問 16]

友人・知人に本プログラムへの参加を勧めたいと思われますか？

(回答選択肢)

強く勧めたい

やや勧めたい

どちらともいえない

あまり勧めたくない

全く勧めたくない

[設問 17]

上記のご回答（質問：友人・知人に本プログラムの参加を勧めたいか）について、差し支えない範囲で、そのように思われた理由をお聞かせください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 18]

東大 FFP を受講したことによって、ご自身の意識変容はありましたか？

(回答選択肢)

あった

なかった

[設問 19]

上記のご回答について、差し支えない範囲で、そのように思われた理由をお聞かせください。



(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 20]

東大 FFP を受講したことによって、ご自身の行動変容はありましたか？

(回答選択肢)

あった

なかった

[設問 21]

上記のご回答について、差し支えない範囲で、そのように思われた理由をお聞かせください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 22]

FFP 修了後に以下のアラムナイ活動に参加した経験はありますか？

1. 模擬授業の協力者
2. 履修証授与式の協力者
3. 図書館ミニレクチャの登壇者
4. 図書館ミニレクチャの聴衆
5. メーリングリストへの投稿
6. 勉強会や研究会などのイベントに参加
7. 他大学へのミニレクチャの登壇者
8. その他

(回答選択肢)

※各項目につき、

経験していない

1 回

2 回

3 回

4 回

5 回以上

[設問 23]

「その他」に関して経験があると回答した方は、具体的な内容を教えてください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 24]

東大 FFP 修了者を対象とした学習機会があった場合、参加を希望されますでしょうか。

(回答選択肢)

ぜひ参加したい

参加したい

わからない

参加したくない

[設問 25]

東大 FFP 修了者を対象とした学習機会であったらよいものをお教えてください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 26]

【任意】 差し支えなければ、お名前を教えてください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

[設問 27]

【備考】 その他コメントや連絡事項があればご記入ください。

(回答選択肢)

記述式テキスト

アンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。今後とも東大 FFP をどうぞよろしくお願いいいたします。

## (付録) 修了生フォローアップ調査集計結果

### [基本情報]

(回答者の性別と年代)

| 回答者の性別と年代 | 年代   |      |      |      |      |     |
|-----------|------|------|------|------|------|-----|
| 性別        | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 | 総計  |
| 女性        | 18   | 43   | 21   | 6    | 2    | 90  |
| 男性        | 21   | 49   | 9    | 3    | 4    | 86  |
| 回答しない     | 1    | 0    | 1    | 0    | 0    | 2   |
| 総計        | 40   | 92   | 31   | 9    | 6    | 178 |

N=178 単位：人

(回答者の受講時期ごとのアンケート回収率)

| 受講者の受講時期         | 人数  | 該当期<br>受講者数 | 回収率<br>(%) |
|------------------|-----|-------------|------------|
| 覚えていない           | 5   |             |            |
| 第 1 期 (2013 年春)  | 7   | 52          | 13.5       |
| 第 2 期 (2013 年秋)  | 6   | 49          | 12.2       |
| 第 3 期 (2014 年春)  | 5   | 50          | 10         |
| 第 4 期 (2014 年秋)  | 2   | 50          | 4          |
| 第 5 期 (2015 年春)  | 6   | 50          | 12         |
| 第 6 期 (2015 年秋)  | 8   | 52          | 15.4       |
| 第 7 期 (2016 年春)  | 15  | 48          | 31.3       |
| 第 8 期 (2016 年秋)  | 5   | 50          | 10         |
| 第 9 期 (2017 年春)  | 6   | 50          | 12         |
| 第 10 期 (2017 年秋) | 5   | 47          | 10.6       |
| 第 11 期 (2018 年春) | 12  | 48          | 25         |
| 第 12 期 (2018 年秋) | 7   | 45          | 15.6       |
| 第 13 期 (2019 年春) | 9   | 52          | 17.3       |
| 第 14 期 (2019 年秋) | 14  | 50          | 28         |
| 第 15 期 (2020 年春) | 12  | 59          | 20.3       |
| 第 16 期 (2020 年秋) | 11  | 43          | 25.6       |
| 第 17 期 (2021 年春) | 15  | 61          | 24.6       |
| 第 18 期 (2021 年秋) | 9   | 42          | 21.4       |
| 第 19 期 (2022 年春) | 19  | 58          | 32.8       |
| 総 計              | 178 |             |            |

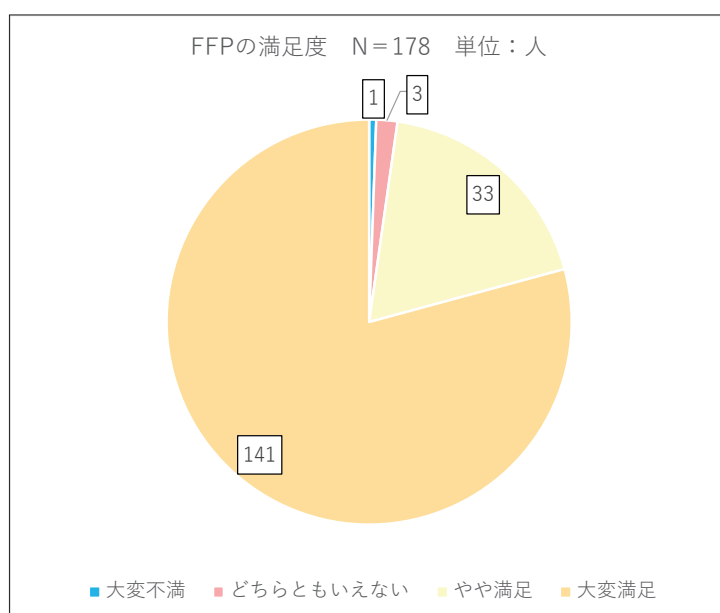
N=178 単位：人

(回答者の専門分野の内訳)

| 学科系統 | 度数  | 比率 (N = 178) |
|------|-----|--------------|
| 人文科学 | 66  | 37.08        |
| 社会科学 | 37  | 20.79        |
| 理学   | 25  | 14.04        |
| 保健   | 23  | 12.92        |
| 工学   | 22  | 12.36        |
| 教育   | 11  | 6.18         |
| その他  | 10  | 5.62         |
| 農学   | 8   | 4.49         |
| 芸術   | 3   | 1.69         |
| 家政   | 1   | 0.56         |
| 総計   | 206 | 115.73       |

[満足度関連]

(全体の満足度)



(満足度と受講時期の関連)

| 満足度と受講時期の関連    | FFP の満足度 |               |      |      |     |
|----------------|----------|---------------|------|------|-----|
| 受講時期           | 大変不満     | どちらとも<br>いえない | やや満足 | 大変満足 | 総計  |
| 覚えていない         |          |               | 1    | 4    | 5   |
| 第1期 (2013 年春)  |          |               |      | 7    | 7   |
| 第2期 (2013 年秋)  |          | 1             | 1    | 4    | 6   |
| 第3期 (2014 年春)  |          |               |      | 5    | 5   |
| 第4期 (2014 年秋)  |          |               |      | 2    | 2   |
| 第5期 (2015 年春)  |          | 1             | 1    | 4    | 6   |
| 第6期 (2015 年秋)  | 1        |               | 2    | 5    | 8   |
| 第7期 (2016 年春)  |          |               | 4    | 11   | 15  |
| 第8期 (2016 年秋)  |          |               | 1    | 4    | 5   |
| 第9期 (2017 年春)  |          | 1             | 1    | 4    | 6   |
| 第10期 (2017 年秋) |          |               | 1    | 4    | 5   |
| 第11期 (2018 年春) |          |               |      | 12   | 12  |
| 第12期 (2018 年秋) |          |               | 1    | 6    | 7   |
| 第13期 (2019 年春) |          |               | 3    | 6    | 9   |
| 第14期 (2019 年秋) |          |               | 5    | 9    | 14  |
| 第15期 (2020 年春) |          |               |      | 12   | 12  |
| 第16期 (2020 年秋) |          |               | 2    | 9    | 11  |
| 第17期 (2021 年春) |          |               | 2    | 13   | 15  |
| 第18期 (2021 年秋) |          |               | 3    | 6    | 9   |
| 第19期 (2022 年春) |          |               | 5    | 14   | 19  |
| 総計             | 1        | 3             | 33   | 141  | 178 |

N=178 単位：人

(満足度と現在の身分との関連)

| 満足度と現在の身分との関連      | 満足度  |           |      |      |     |
|--------------------|------|-----------|------|------|-----|
| 現在の身分              | 大変不満 | どちらともいえない | やや満足 | 大変満足 | 総計  |
| 修士課程 1 年           |      |           |      | 4    | 4   |
| 修士課程 2 年 (含 2 年以上) |      |           |      | 1    | 1   |
| 博士課程 1 年           |      |           | 2    | 1    | 3   |
| 博士課程 2 年           |      |           | 3    | 9    | 12  |
| 博士課程 3 年           |      |           | 1    | 12   | 13  |
| 博士課程 4 年以上         |      |           | 6    | 12   | 18  |
| ポストドクター            |      |           | 5    | 12   | 17  |
| 研究機関の研究職           |      |           | 2    | 11   | 13  |
| 大学教員 (含高専短大)       |      | 2         | 8    | 59   | 69  |
| 小・中・高、特別学校の教員      |      |           |      | 2    | 2   |
| 一般企業               | 1    | 1         | 3    | 8    | 13  |
| 大学職員 (含高専短大)       |      |           | 2    | 4    | 6   |
| 自営業・フリーランス         |      |           |      | 2    | 2   |
| その他                |      |           | 1    | 4    | 5   |
| 総計                 | 1    | 3         | 33   | 141  | 178 |

N=178 単位：人

(満足度と FFP の参加を勧める度合いとの関連)

| 満足度と FFP の参加を勧める度合い | FFP への参加を勧める度合い |           |        |        |     |
|---------------------|-----------------|-----------|--------|--------|-----|
| 満足度                 | 全く勧めたくない        | どちらともいえない | やや勧めたい | 強く勧めたい | 総計  |
| 大変不満                | 1               |           |        |        | 1   |
| どちらともいえない           |                 | 3         |        |        | 3   |
| やや満足                |                 | 1         | 24     | 8      | 33  |
| 大変満足                |                 | 2         | 14     | 125    | 141 |
| 総計                  | 1               | 6         | 38     | 133    | 178 |

N=178 単位：人



(満足度と修了者を対象とした学習機会への参加希望の度合いとの関連)

| 満足度と修了者を対象とした<br>学習機会への参加希望 | 修了者を対象とした学習機会への参加希望 |       |       |         |     |
|-----------------------------|---------------------|-------|-------|---------|-----|
| 満足度                         | 参加したくない             | わからない | 参加したい | ぜひ参加したい | 総計  |
| 大変不満                        | 1                   |       |       |         | 1   |
| どちらともいえない                   | 1                   | 1     | 1     |         | 3   |
| やや満足                        |                     | 11    | 16    | 6       | 33  |
| 大変満足                        | 1                   | 19    | 52    | 69      | 141 |
| 総計                          | 3                   | 31    | 69    | 75      | 178 |

N=178 単位：人

(満足度とアラムナイへの参加状況との関連)

| 満足度とアラムナイへの<br>参加状況 | アラムナイへの参加状況 |    |    |    |    |          |           |           |     |
|---------------------|-------------|----|----|----|----|----------|-----------|-----------|-----|
| 満足度                 | 経験して<br>いない | 1回 | 2回 | 3回 | 4回 | 5回<br>以上 | 10回<br>以上 | 15回<br>以上 | 総計  |
| 大変不満                |             | 1  |    |    |    |          |           |           | 1   |
| どちらともいえない           | 3           |    |    |    |    |          |           |           | 3   |
| やや満足                | 19          | 11 | 2  |    |    | 1        |           |           | 33  |
| 大変満足                | 49          | 29 | 25 | 10 | 7  | 17       | 3         | 1         | 141 |
| 総計                  | 71          | 41 | 27 | 10 | 7  | 18       | 3         | 1         | 178 |

N=178 単位：人

## [身分の推移]

(回答者の受講当時の身分と現在の身分との関連)

| 当時と現在の身分     | 現在の身分 |      |                 |                  |                     |                    |      |                     |                    |     |     |
|--------------|-------|------|-----------------|------------------|---------------------|--------------------|------|---------------------|--------------------|-----|-----|
| 当時の身分        | 修士課程  | 博士課程 | ポスト<br>ドク<br>ター | 研究機関<br>の<br>研究職 | 大学教員<br>(含高専<br>短大) | 小中高・<br>特別学校<br>教員 | 一般企業 | 大学職員<br>(含高専<br>短大) | 自営業・<br>フリーラ<br>ンス | その他 | 総計  |
| 本学科目等履修生・研究生 | 2     |      |                 |                  |                     |                    | 1    |                     |                    |     | 3   |
| 本学修士課程       | 3     | 2    |                 |                  | 4                   | 1                  | 7    |                     |                    | 2   | 19  |
| 本学博士課程       |       | 44   | 8               | 10               | 42                  | 1                  | 5    | 2                   | 2                  | 2   | 116 |
| 本学ポストドクター    |       |      | 8               | 2                | 8                   |                    |      | 1                   |                    |     | 19  |
| 本学教員         |       |      |                 | 1                | 9                   |                    |      |                     |                    |     | 10  |
| 本学職員         |       |      | 1               |                  | 3                   |                    |      | 3                   |                    |     | 7   |
| オブザーバー       |       |      |                 |                  | 3                   |                    |      |                     |                    | 1   | 4   |
| 総計           | 5     | 46   | 17              | 13               | 69                  | 2                  | 13   | 6                   | 2                  | 5   | 178 |

N=178 単位：人

[学術振興会特別研究員関連]

(回答者の学術振興会特別研究員の採択経験の割合)

| 回答者の日本学術振興会特別研究員の採択経験     | 人数  |
|---------------------------|-----|
| 該当しない                     | 100 |
| 該当する (DC1、DC2、PD、SPD、RPD) | 78  |
| 総計                        | 178 |

N=178 単位：人

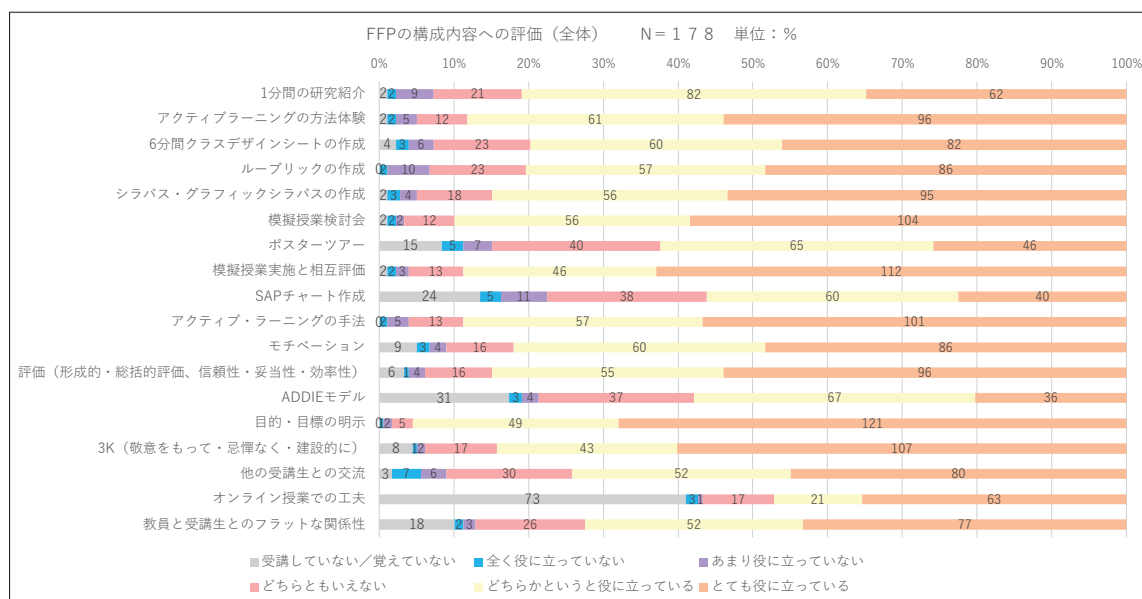
(回答者の受講時期と学術振興会特別研究員の採択経験との関連)

| 受講時期と<br>学術特別研究員の採択経験 | 学術特別研究員の採択経験 |      | 総計  |
|-----------------------|--------------|------|-----|
|                       | 該当しない        | 該当する |     |
| 受講時期                  |              |      |     |
| 覚えていない                | 3            | 2    | 5   |
| 第1期 (2013 年春)         | 1            | 6    | 7   |
| 第2期 (2013 年秋)         | 2            | 4    | 6   |
| 第3期 (2014 年春)         | 5            | 0    | 5   |
| 第4期 (2014 年秋)         | 2            | 0    | 2   |
| 第5期 (2015 年春)         | 1            | 5    | 6   |
| 第6期 (2015 年秋)         | 2            | 6    | 8   |
| 第7期 (2016 年春)         | 7            | 8    | 15  |
| 第8期 (2016 年秋)         | 2            | 3    | 5   |
| 第9期 (2017 年春)         | 1            | 5    | 6   |
| 第10期 (2017 年秋)        | 4            | 1    | 5   |
| 第11期 (2018 年春)        | 9            | 3    | 12  |
| 第12期 (2018 年秋)        | 3            | 4    | 7   |
| 第13期 (2019 年春)        | 4            | 5    | 9   |
| 第14期 (2019 年秋)        | 10           | 4    | 14  |
| 第15期 (2020 年春)        | 6            | 6    | 12  |
| 第16期 (2020 年秋)        | 9            | 2    | 11  |
| 第17期 (2021 年春)        | 11           | 4    | 15  |
| 第18期 (2021 年秋)        | 7            | 2    | 9   |
| 第19期 (2022 年春)        | 11           | 8    | 19  |
| 総計                    | 100          | 78   | 178 |

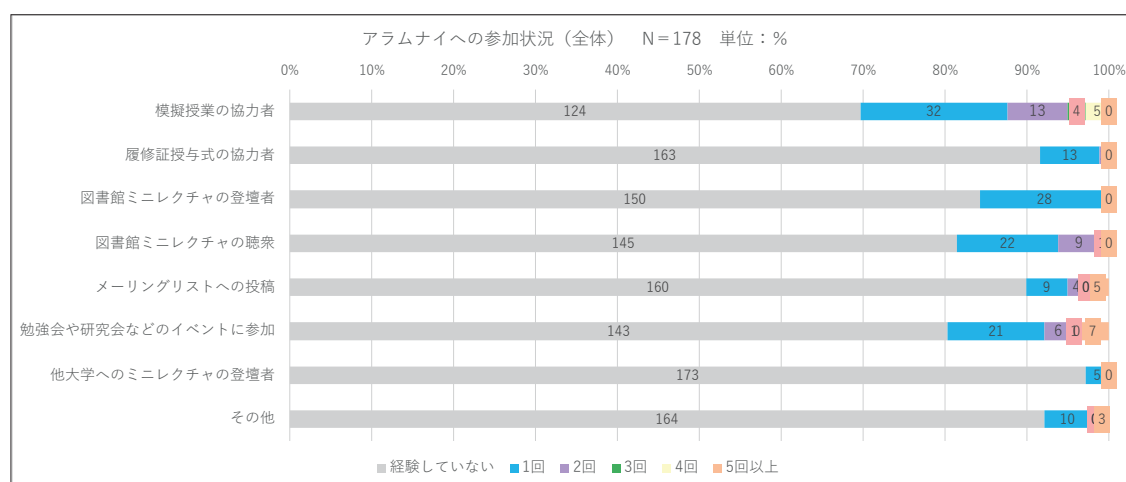
学術特別研究員 = (DC1、DC2、PD、SPD、RPD) N=178 単位：人

## [FFP の構成内容]

(FFP の構成内容への回答者の評価)



## [アラムナイへの参加状況]



## [受講による意識変容と行動変容]

(回答者の受講による意識変容と行動変容の有無)

| 受講による意識・行動変容 | 行動変容 |      | 総計  |
|--------------|------|------|-----|
|              | あった  | なかった |     |
| 意識変容         |      |      |     |
| あった          | 147  | 18   | 165 |
| なかった         | 10   | 3    | 13  |
| 総計           | 157  | 21   | 178 |

N=178 単位：人

(満足度と意識変容との関連)

| 満足度と受講による意識変容 | 意識変容 |      | 総計  |
|---------------|------|------|-----|
| 満足度           | あった  | なかった |     |
| 大変不満          | 1    |      | 1   |
| どちらともいえない     | 2    | 1    | 3   |
| やや満足          | 28   | 5    | 33  |
| 大変満足          | 134  | 7    | 141 |
| 総計            | 165  | 13   | 178 |

N=178 単位：人

(満足度と行動変容との関連)

| 満足度と受講による行動変容 | 行動変容 |      | 総計  |
|---------------|------|------|-----|
| 満足度           | あった  | なかった |     |
| 大変不満          | 1    |      | 1   |
| どちらともいえない     | 2    | 1    | 3   |
| やや満足          | 27   | 6    | 33  |
| 大変満足          | 127  | 14   | 141 |
| 総計            | 157  | 21   | 178 |

N=178 単位：人

(付録) 10 周年記念シンポジウムポスター



東京大学 フューチャー・ファカルティ・プログラム (東大 FFP)

# 10 周年記念シンポジウム

日時 | 2023 年 2 月 27 日 10:00 ~ 12:00

場所 | オンライン (下記 URL もしくは 2 次元バーコードからお申し込みください)

URL | <https://onl.la/NLkY3YY>

主催 | 東京大学大学総合教育研究センター



## プログラム (10:00 - 12:00)

開会 朴 源花 大学総合教育研究センター / 助教

挨拶 浅見 泰司 大学総合教育研究センター / センター長  
太田 邦史 東京大学理事・副学長 (教育、情報)

祝辞 池田 貴城 文部科学省高等教育局 / 局長  
代読 古田 和之 文部科学省高等教育局 / 大学教育・入試課長

東大 FFP の軌跡と展望 栗田 佳代子 大学総合教育研究センター / 副センター長

プレ FD 実施大学から 榊原 暢久 芝浦工業大学教育イノベーションセンター教授

修了生から 波多野 綾子 オックスフォード大学博士課程 (法学) 在学中  
勝野 正博 目白大学メディア学部メディア学科准教授

オブザーバーから 加藤 真紀 名古屋大学高等教育研究センター教授

パネルディスカッション 栗田 他登壇者

閉会 朴 源花 大学総合教育研究センター / 助教

東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大 FFP）  
10 周年記念シンポジウム実施報告書

---

発 行 2023 年 9 月吉日

発 行 者 栗田佳代子

印刷会社 株式会社セイコー社

本誌の無断複写・複製・転載を禁じます。





東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO



東京大学  
大学総合教育研究センター  
Center for Research and Development of Higher Education  
The University of Tokyo